主幹・麻生路郎

川柳雜誌

次水

八月號

大正十二年三月二日第三種郵便物認可
昭和三年八月十日發行（毎月一回十日發行）

川柳雜誌 第五卷 第八號

川柳雜誌社發行

納涼懇談 **キャンピングの會**

於 六甲山上

本社は八月例會を休會とし、六甲山上で一夜天幕生活を致す事になりました奮つて御參加を願ひます。特に御案内を差上げませんから**八月五日**までに本社事務所宛に御申込みを願ひます。

時 日 八月十一日午後四時梅田阪急停留所へ集合（但神戸方面の方は六甲停留所へ四時半迄に參集ありたし）

同夜、山上にてテントに一泊

翌朝下山のこと。雨天の節は中止。

會費 金 貳 圓

（夕食、朝食費を含む。但六甲停留所までの電車賃自辨）

兼題 「暑」三句 路郎選

▼**青明忌**

▼日時 八月五日午後七時

▼會場 神戸市電山手線下山手五丁目下車北へ半丁 四宮神社々務所

▼兼題 「煙」三句 路郎選

▼會費 三十錢

地方作家の來會及投句を歡迎す

（主催）川柳雑誌社神戸支部

（後援）川柳雑誌社

川柳雑誌 第五巻第八號 目次

感想・評論

寫生といふこと　川村花菱

昨年のこと　小出楢重

渤ひ火のあと　川上三太郎

苦吟か快吟か　庄萬よし

再び往診と來診に就いて　岩本素人

往診問題へ　大橋かい痴

研究・其他

柳樽評釋廿四篇まで（一一）麻生路郎

猫の眼　大道鍋平朝臣

古句質疑　蛭子省二

軍配の句に就いて　森東魚

自信の句と其作句動機　諸家

月評　路郎、紋太郎、松郎、山雨樓

一路集（募集句）

丸髷　前田省郎選

居眠り　麻生霞乃選

鉦前　河野春魚共選　中野柳陽共選

本社七月例會　橋本二柳子記

川柳家戸籍調　安井ひろし

各地柳壇

（表紙）思ひ出　柴谷柴舟

題字　小出樽重

編輯後記　革郎生

創作

生の疼き　麻生路郎

川柳塔

庄萬よし　高橋かほる

岩本素人　西本三笑

松盛琴人　酒井駒人

横田眠聲　岩崎柳路

竹内多聞　高見柳骨

檜山千代二　橋本二柳子

松丘町二　島田翠峰

水谷鮎美　猪野燕柳

安西杏三　長谷川一徹

中島鐵州　朝田新水

楊井二南　水田黄彩

村松曼平　中見光路

中澤濁水

粒々集

川村花菱　長崎柳秀

青砥可明　柴谷柴舟

安川久流美　姪子省二

富士野鞍馬　椙元紋太

光耀　捗

葭乃・欣女、多喜女、武子、壽枝女

よし江、吟女

近作柳樽諸家

生の疼き

麻生路郎

お辭儀する醜體の見ゆ　呑めばとて
子よ　妻よ　ばらばらになれば淨土なり

亡きロンドンを思ふ（一句）

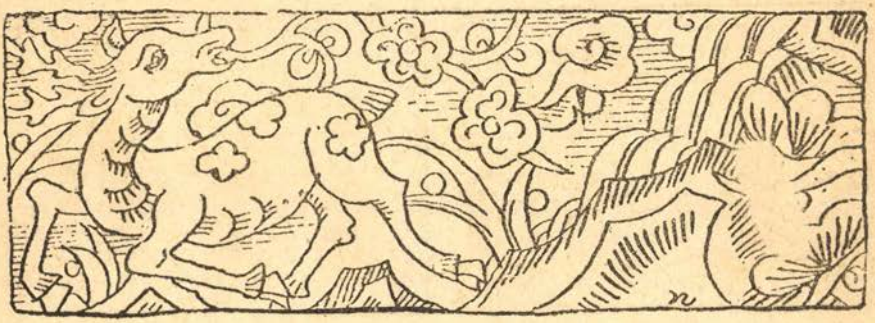
みじかしといふか　ほんとに生きた子に
戯れに死ねれば　こころやすからん
今日も店にゆきたるのみ　机のほこり
この上の貧しさへ落ちこまんか　佳し
わがままを　父　特權と思ひるず
俺の子といふのがあつて　おそろしく

近作柳樽

路郎選

犬の子のはる〳〵汽車にのせられて　魚崎　亂耽
日輪を脊負ふて馬の勞働者　同　同
豆の葉のそよぎ幸ある戀となれ　同　同
、たんつぼを集め小使消えてゆく　同　同
友達へ話しの種の戀もして　同　同
オーケストラの誰かごまかしさうなもの　同　同
女中への手紙戀とはあほらしや　同　同
赤い思想になり父母にあふ　同　同
空想の手にしっかりと赤切符　大阪　聞路
打明けるチャンス今までありはあり　同　同
家主が遠ふ屋根の高低く　同　同
命日か藏のあつちに木魚鳴る　同　同
戀人と歩調が揃ふアスフハルト　同　同
靈魂の捨て場にしてはむさくろし　螢ヶ池　寂郎
嘘でしようといはるゝやうに死よ來れ　同　同
今日も見る人間の死の簡單さ　同　同
死んでから漸やく氣付くことばかり　同　同
紋附も仕付の儘と母は泣き　同　同

○朝の膳　立てば働く父になる　金澤　銀砂子
圓本など飾つて夫婦二人ゐる　同　同
頼られる息子にいつかなつてゐた　同　同
賀川服朝を冷たく鐵にふれ　同　同
、宅はまだ歸りませぬと上らさぬ　神戸　卯生
窓からは毎日逢ふてゐるけれど　同　同
貴方でもよいわ一緒に歩きましよ　同　同
妻の夢話さぬとこもあるらしい　同　同
包を解いて親を味はふ　豐中　石竹
、これ以上辛棒すれば笑はれる　同　同
遠目から勤めて居るを見て戻り　同　同
その裏は來た卒業出來ず　同　同
、うらゝかな日なり山から音がして　神戸　竹木
母さんをじつとながめて暮すなり　同　同
春さきの音は天まであがるなり　同　同
一生をまかす話はあとのこと　同　同
人參の甘さに似たる男かな　大阪　毒仙
金色の手が魂へ伸びて來る　同　同
孝行に惚れて着剛れし木綿縞　同　同
乳の出る後妻を頼むむごらしさ　同　同
よくなればまた出て貰ふ事として　別府　晃卓
つくす丈けつくしたからとかへり見ず　同　同
長い者に卷かれて生きる人の數　同　同
本當の心になつて落ちぶれる　螢ヶ池　光哉

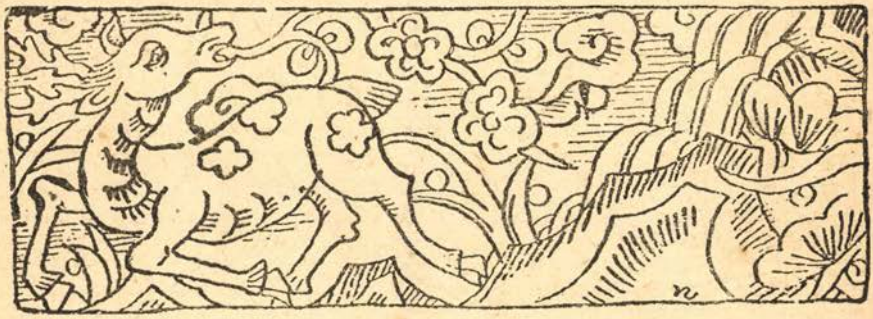


理屈もあろうが義理の中じやないか　同
放蕩か離縁する氣か家を留守　同
美髯丈けに貧乏が目立つなり　朝鮮　東狂子
何主義と言ふも結極イゴイスト　同
無標緞が一人離れて立つてゐる　同
金のわざ心ひかれて向き直り　同　春菱
妓の細いからだで支へ五千金　同　明
絹浴衣驕れる肌は衰へず　同
番頭の通ひになつて世帶じみ　同　大阪　彩秋
朝顔が人生觀を教へてゐる　同
更生の夜明けにひゞく竹籬　同　神戸　重陽子
目隱しをされて妻をばあてがはれ　同
其事を告げるに二度も書きそこね　同
女氣の明日の時計を進めさき　同　大阪　露斗
緣なればこそ貧しさへ貰はれる　同
かゝる日がいつ迄續くのか貧し　同
夕やみは子守のせなも包んだり　同
三年と云ふ日月を二人きり　同　大阪　凡平
口上手抱いても吳れずたゞほめて　同
意見なかばに新地から電話　同
四五人も寄れば女の方が勝ち　同　姫島　觀月
體裁が金になつてく都なり　同
顏色が巡査になつてやけてきた　同
疑がへば妾はこわい人ばかり　同　大阪　冷笑

人間が悪くなつたと湯にひたり　同
腹違ひ姉の落度をかばうなり　同
薄ノロを知つて兩親遺しき　尼崎　虚白
みなりほど人の心も違ふのか　同　同
はゝをかほふて自動車をねめ　同　同
いざと言へば立てる姿のリキシヤマン　神戸　嶺月
蒲團などよけて按摩の塲をこさへ　同　同
極道と云はれたくない厚司で來　同　同

九州にて（一句）

坑に入る坑夫へ朝日ほのぐと　大阪　雅幽
ねぢれたかそれが活きてく力なり　同　同
なるやうになつたか子供抱いて居る　同　同
殘されたものがお金になりもせず　神戸　鐘々
もうすこし娘やさしくるべきなり　同　同
姉さんと呼びなれて來るさみしさよ　島根　花情
君慧しビールの泡の消ゆがてに　同　同
嫁に先き髪染めさせて見る姑　和歌山　玉仙
末の子に嫁に知らさぬ金もいり　同　同
何時までも俺に何某方がつき　大阪　廻天童
豆腐屋と豆腐屋路次をゆづりあひ　同　同
小使にまで我黨を浸みこませ　長野　高峰
又別な理屈仲裁聞かせられ　同　同
貧しさは人一倍の愛となり　大阪　正博
紙屑屋月に一度は休むなり　同　同



お化粧の最中泣いた子が戻り　大阪　しづか
落ちついて話せと丁稚座らされ　同　同
永遠に歸らぬ君に子が育ち　大阪　伴内
庵主さん子供のやうに丸々し　同　同
釣臺に一匹の蠅つきまとひ　大阪　樂鳥
水鐵砲まづ父親がやつて見せ　同　可樂
ボーナスの當座眞面目な椅子にゐる　鞍山　同
丸粥の通知婦長の輕い足　同　同
院長へ命の惜しい顔ばかり　名古屋　仰天
賽錢の利き目があれば神でなし　同　同
きつぱりと言つてしまへば又揉める　鞍山　草明
本當の腹を聞いてる相談所　同　同
鼻筋へこつてりぬつて待ほうけ　大阪　賀名芽
取ついでやつた電話のゝろけやう　同　同
表から裏から透いて長屋夏　石川　水聲
釣り合ぬなどゝ云ふのは斷はる氣　同　同
欄干にしばし二人はだまり合ひ　大阪　草之介
男同士のボートの中はハーモニカ　同　同
二度目の波に二人ともぬれ　京都　春公子
にきびなど取つておつたら日が暮れる　同　同
初戀だのに相手が惡い女給なり　大阪　將軍星
艶文に附箋がついて戻つて來　同　同
戀すればこそオド〳〵ときたゞ弱し　兵庫　よし源
誰れとでも話して居たい年になり　同　同

間に合はす丈けの仕事に草臥れる　大阪　與詩夫
缺勤の理由へ社長只笑ひ　同　同
見送りに妻糊つきの晴着にて　大阪　柳狂
買はぬ氣が寄つて素見かす支那呉服　同　風柳坊
佛像へ名僧輕い咳をする　同
面白い話に母も割りこませ　同
大きなことは父にまかして働かう　神戸　駒作
なるほどと男がてんしてくれた　同
ロハ臺のどつちも一人連れてゐる　同
メリヤス屋どれも損する品ばかり　大阪　梢雨
夜な〳〵の灯に青春を盗まれむ　同
いつしかに笑はぬ眼とはなりました　島根　緣之助
弱くなれ〳〵こて修身書　同
コケッシュな女硝子に息をかけ　大阪　愚陀
豆腐屋を呼ぶに夫をたのんでる　同
金出來てあんたはどなただしたいな　池田　白蝶
見下ろせば港の街も五月なり　同
商人はまたも儲けることになり　神戸　鈴月
百ケ日最早田植の始まつて　同
そこまでの辛抱あればなどゝ言ひ　臺北　冬木立
臨月をデパート迄も止められる　同
嫁の髷もう親類へ知れてゐる　神戸　小蓬
金だけで走つたやうに言はれたり　同
内職のなくてはならぬ爪と知る　大阪　赤城
　　同

二十圓やつたことさへあつた人　神戸　兆里
叱られるやうなことして嬉しい日　同　同
たゞ金が足りないだけの生活さ　金澤　好次
人皆んな箸持つことのなかりせば　同　同
三十かなどと言はせる生活苦　筑前　鄕川
チトふざけ過ぎて娘の氣をそんじ　山梨　一笑
二人の兒鑵の底迄叩かせる　大阪　佳風
取次ぎに出たは病氣と言ふ男　同　吉朗
心中のうわさかがやかしい海よ　山口　竹馬人
憂鬱を鏡の前で笑つて見　神奈川　粹狂
生きる道頼みに行つて堅い膝　神戸　志郎
うしまでも賣つて女房にしたおんな　大阪　柳人
吊革に腋を氣にせぬ年になり　同　南天
電車道になつて賣上ぐつと減り　同　陽喜亭
喰ふ事に馴れて戀でも探さんか　大阪　呑陽

三女逝く

慰めた瓶のメダカを見るにつけ　姫島　二竹
引越に會社の傘が一本出　大阪　正吉
聞いておくれと伜にひらき直るなり　同　泰平
親がないだけに世間を早く知り　東京　竹葉
大勢に笑はれ腹が立ち損ね　大阪　曼平
中程で笛方ウカと眠りかけ　池田　北城
鏡臺のほこりに淋しい日のつづく　山口　迷羊
議會見て次は棄權と一人定め　大阪　惡源太

六ケ敷い話　羽織でやつて來る
連れて來た手前ランチで濟まされず　鳥取　穂波子
長持に先夫の投げた皿の跡　大阪　緣夢
五六人だまして仲居るなくなり　同　阿々子
相合傘夫の方が少しぬれ　同　白人
寢てるても乳屋が來たを知つてるる　山口　維新一郎
見込まれた男バリーを見てかへり　德島　茂介
兒のおしめ見覺えのある浴衣にて　大阪　休歩
感情の皆酒になる男なり　兵庫　淡水郎
空豆の青さに夏の色を見る　大阪　珍月子
道連れの何んにも知らず毒を呑み　池田　雪峰
見せつけるやうに腕卷見てこられ　大阪　幸泉
作業着で行けば飼犬見損ない　大阪　源坊
ラヂオなぞこらせず昔氣質なり　和歌山　無心
金持がまだ金もうけさがしてる　不明　錄山
男一匹ちりを氣にして痩せている　京都　十葉
結納へ普請も少し出來ました　堺　太路
一匹の蠅へ病人氣が疲れ　富田林　三次
杯を强ひる女は惚れてるる　大阪　苦香
こゝで又いつもの例へ口に出る　神戸　鐵庵
その娘足袋をはくのも姿なり　大阪　翠川
初戀を語り得ざりし若き日よ　同　將兵
孝行はしたいが親の氣の强さ　螢ヶ池　紫海
恙なく丸髷小さくなつて行き　神戸　幸水
錠前の樣に夫を信じ度し　滿洲　可樂
丸髷のお連れに女給取り合わず　不明　蔦峯
均一の夏帽で店せまふなり　大阪　一舟

寫生と云ふ事見つめると云ふ事

川村花菱

川上三太郎と會ふたんびに路郎さんのはなしが出る。川柳のはなしをしやうと思つて行くたんびに大勢客が居て……これは路郎さんが三太郎にはなされた私の下阪の度の感じであつた。私は昨年から月に一度位は必ず下阪する用向きがある。多い時には月の中に二度も梅田に降りる事がある。大阪へ行く度に、此度こそは路郎さんにしみ〴〵會ひ度いと思ひながら、電話さへかける暇のないまゝに心を殘して立ちかへる事が多い。

雜用につゞく雜用、私のあたまの中は、砂つぼこりが立つやうになつて、川柳に親しまない事、實にもう永い事になる。

お蔭さまで……

私は此頃、やたらに此の言葉をひとり云ふ。誰に向つて云ふのでも無い。只云ふのだ。それは、私が、此の數ケ月、全く落ついて机に向ふ事が出來はじめたからである。

讀む事も、書く事も、やゝ元に戻りかけて來たのがうれしいのだ。そして、何より先に川柳の雜誌や本を讀んで見たいろ〳〵の雜誌をもしばらく離れて居た親しい友達に會ふやうな心持で手に取つた。そして、

みんな大きなりやがつた

としみ〴〵思つた。『川柳雜誌』も、『きやり』も、共に堂々たる雜誌であつた。その中の評論も見た、句も見た。が、それは生意氣だが私を失望さした。評論も大した進歩がない。句に至つては更に低下したやうな氣がしたのはどうしたものであらう。句柄は達者になつて居るところは見ゐる、見る範圍も廣くなつて居るやうに思へる。使ふ言葉もいろ〳〵に新しい形を取つて居る事も見ゐる。句の調子も變つて居る事も見ゐる、が我が川柳詩人は、只自分の心持だけで物を見、自分の力丈の表

現しかして居ないのにがつかりした。深味がない、グンと胸にこたへるひゞきがない。眞實の聲がない。

私は寫生と云ふ事を考へて見た。云ふまでもなく、寫生とはある個性を通じて見、自然人生を表現したものであらねばならない。只見ただけのものではない。見たものを表現してはじめて寫生句としての生命があるのだ。見た感じを十七字で云ひ表すと云ふのでは決してない。そこに見た人の個性があり、そこにその個性に由つて表現された獨自の力がなくてはならない。これは、單に自分に對する他、己れに對する自然のみの事でなく、自分が自分の心を感じ、心を見、思ひを表現する點に於ても同じである。我々は時々にいろ〳〵の心持を持つ、けれど、持つたものがいつも正しい深いものではない。ふとした思ひつきもあれば、單なる感情だけのものもある。自分が感じた、自分が思つた、それを正しく表しさへすれば、そこに川柳が出來上るとは云へないと私は思ふ。感じた事、見た事凡て句の對照となるべきものを、じつと本當に底の底まで見つめる所にいろ〳〵の意味があるのだ。自分の心を、見つめ、思ひつめ、しつかりと考へたものが表現された時に、はじめて、句は我々人間の胸に生きたものとして通つて來るのである。

明治時代に、ある高僧の名ある人が、ごうかして佛のすがたをまのあたり見たいとして、暇さへあれば白紙へ持つて行つて佛さまのすがたの判を根よく押しゝゞけて居たと云ふはなしを聞いた事がある。何十年となく、暇さへあればこれを行つた精進の點には恐入るが、眼からものゝ本當のすがたを見きわめやうとした努力にはいさゝか失笑せざるを得なくなつた。川柳としても決して眼からのみ物が見られるものではない。心の眼を見ひらいてこそ、そこにはじめて、物の眞のすがた、本當の力が見られるのだ。

本當と云ふ事はいゝ事だ。本當にはうそがない。うそには本當がないと同時に、淺薄である。上つらの見方は、見た當人は本當だと思つても、それはほそこないであり以上巧ざる嘘と同じものになる。本當は幼稚でも何か持つて居る。その持つて居るものを我々と共鳴する。そこに貴さがあると思ふ。

私は寫生と云ふ言葉を使つたが、これは空想の場合にも同じ事が考へられる。ある作者の空想を、しつかりと見つめた上に表現されたものは、それもやつぱり同じ値を持つて居る。

新年に只青々と河童居る。

と云ふ三太郎の句がある。河童と云ふものがあるとか無いとか、新年と河童とどんな因果關係があるとか云ふやうな猥雜な心持を此の句に對して持つべきものではない。此の句は私の大好きな句で、尊敬すべき川柳詩人川上三太郎のゐらさを思はせる。

お父さんはやはり川柳々々と云つてるよ

路郎さんの句がある。一體それが怎したんだと云ふのはなさけない事である。

私は此の句の中に路郎さんの苦しい泣くにもなかれない心持を見る事が出來る。悲しいさびしい、怎しても取りかへしのつかないどん底の悲哀とも云ふやうなものが、グワンと私の胸にこたへて來る。私が、貧乏のどん底に居た頃、私は机にかぢりついて日記を書いて居た。すると、子供を膝にのせた女房が、子供に向つて獨言を云つて居た。

ほら御らん、御父さんが又書いてらつしやる。雨が降つてるとか何とか……

私はその時の事を思ふと、今でも、眼の中がうるんで、鼻の奥の方が、ムーツと熱くなつて來るのを覺える。私は、今でもやつぱり書いて居る。路郎さんも川柳川柳と云づて居るのだ。二人とも同じ事だ。

……苦勞する墨やせる筆、我れいづきの域に達せんとて、硯の海に棹さす身ぞ

齋藤緑雨は怎云つて居る。が、此の文章の中には、痛切の中に何處かにしやれがあるやうに思ふ。心に思ふ事を、文章と云ふ一つの囚はれた樣式に由つて表現する明治文壇の傾向は名文なるが故に、そこに却つてのんきなゆこりさへ感じられるのだ。現代はもつと〳〵切實な表現が出來る筈だ。

お父さんやつぱり川柳々々と云つてるよ

私は此の方が身にこたへる。緑雨のこまり方は、それは〳〵ひどいものであつたさうだ。勿論吾々のそれとは自ら類を異にして居たのだが、時代と云ふものであらう、切實な中にゆとりがある。

路郎氏が、愛兒ロンドン君の一周忌に、此の句をよまれた瞬間、じつと自分を見つめた瞬間、そこから永遠の命がほとばしり出たものであらう。試みに他の句を見ると

お父さんの神經衰弱がわかるかい

信心をはじめたお母さんも可哀想だ

となると、少しづゝネジがゆるんで來たやうで、アウンの呼吸を少しづゝ外れたものになつて居る。

いゝ句はやたらに出來るものではない、要は只いついかなる場合にも、本當に物を見つめて寫生する丈の用意がなくてはならないのだ。

汽車からの二階夫婦と行李があり

私は去年の夏、此句をよんだ。之は見たまんまをよんだのだ。

汽車で見る二階夫婦と行李があり

汽車からの二階夫婦と行李が見る

いろ〳〵にやつた。上の句の句であつた。そして、此のあり

と見えとの表現の間に、自分丈では天地のへだゝりがあるやうに思つて居る。

それから考へた句で

夫婦を行李で六疊を借り

とやつたが、こゝらへものも甚だしいものだと自分でも思つて居る。

路郎さん、此度こそは、ゆつくり會ひませう。話しませう。

去年の事

小出楢重

私は去年の秋、一種の神經的な苦しい病氣をした。それは心臟の活動が一分間に數回も休止すると云ふ頗る不安な病氣であつた。醫者にそのくるしみを訴へても、本當によくのみ込めないらしかつた。

「成程、さう、はあ」

と云ふ位の同情をするだけであつた。そして決して死ぬものでないと云つた。

死なゝい事が確であつても、苦しい事には相違はなかつた。心臟が停止する度びに、私は全く死と生の間を、うろ〳〵するのであつた。

最も惡い時は寢てゐたものであるが、多少いゝ時には用達し位に出あるいたものだ。

途中でふと停滯が始まると私は直ぐタキシーを呼んだ。そして自らの脈搏を數ゐ乍ら走るのであつた。タキシーの窓から死生の間にゆら〳〵と見ゐる街景こゝ羨ましく美しいものであつた。殊に女のパラソルの色はその美しさを數倍に見せた。

或時などはあまりの苦しさからタキシーを捨てるに忍びずとう〳〵阪神國道を芦屋まで走らせて了まつた。そして私の家を見るに及んで私の心臟は安らかに動き出したのであつた。

今大變だつた。死にかゝつた。と云つて見たが、もう慣れ切つてゐる妻君は醫者と同じ顏をし乍ら自動車に乘りたかつたのでせうと云つた。私は隨分いま〳〵しかつたが考へて見ると多少その傾向も無いでは無いとも思へた。

M夫人は私と同じ病氣をした人だつた事を私は思ひ出したので此事を話して見た。

すると夫人は此の病氣をよく了解してくれる人が出來たと云つて大變よろこんだ。そして今度又結滯が起つたらすぐ電話をかけなさい。わたし同情しに行つてあげると云つてくれた。私は全く何々博士の來診よりもこの方が本當の功驗があるだらうと考へた。

然し乍らその後私の心臟は先づ順調に働いてゐる。

自信の句と其の作句動機

川柳家諸賢に「自信の句(一句)と其の作句動機」を御たづねしましたところ、左の御回答に接し、本號に錦上華を添へられた事を喜んでゐます。御回答の中に御名前の落ちて居たものは遺憾ながら掲載を見合せました、不悪御諒承を願ひます　路郎生)

新しい試み

近藤飴ン坊

強情は人皆がもつ足の爪

自分の強情を戒むる座右銘とし且は萬人が萬人共にもつ強情が或時は滑稽にも思はれ、或時は憎くも思はれ、或時は同情もしてゐましたので、フト此句になりました。それは内容のお話。外形の表現としては、新しい試みに出たつもりです。

封外的高唱

山川紫明

おもむろに稼ぎに出たる蝸牛

生きとし生ける總てのものが醜い闘爭を續けつゝある中に超然として最小動物たる蝸牛が「動き」そのものさへ人には見せずに、自信ある生活を營んで居る事が、或は其時の句者其のものゝ對外的高唱であつたのかも知れない。

現在の氣持

松丘町二

魂をぬくめる酒となりました

今までの私の句の多くは、こしらへた句ばかりで、心から生れた句の少いのを恥ぢます。自分の現在の氣持のあるものを僞りなく云つてゐる點で、強いて擧げればこの句でせうか。

幻想を咏んだ

住田亂耽

人類史酒はいづこへ流れゆく

私の家は、酒藏樋比の近くにあります。或る夕、海邊へ出て酒藏の大桶に背をもたせて、思索に耽つて居りました。そこはかとなき酒の香が漂ふて來ます。百日の杜歌が流れて來ます。何となくうれしい雰圍氣の中に浸つて私は既に幻想の國に入つてゐました。

幻想……私はその時、酒を幻想してゐたのです。人類がこの世に出生して以來、人類と酒との交渉を考へて見ました。酒

が凡ての罪惡を作る樣にも思へます。又凡ての快樂は酒によつて與へられるものだとも考へました。複雜なものを持つ酒に不滅の法則々適用しても見ました……こんな風な幻想を詠んだ句が、この句にまとまつたのです。

私の姿　古谷伴内

春の夜は星ばかりなり一人醉ひ

自信のある句かと言はれると一寸困る。中でその表現が自分の氣に入つた句と言つた方が妥當だ。待つてたやうな、待たれてるやうな春も來て見れば、いつも待呆けを喰つたやうな星ばかりの夜を、獨り詰らなく飲み廻つて遣る瀨ない心をしみじみと嚙みしめる　…それが私の姿である。

自己の感懷　前田雀郎

人を捨てゝ人の戀しき影法師

右自信の句と申すよりも、やゝ自己の感懷を叫き得たりと存ずる句に御座候、これ今日も變らぬ小生の嘆かいに有之、かく申せば作句の動機なぞゝ云ふ事殊更めかしく申上げずとも御推察願はるゝものと存じ居り候、御回答まで。

雨の難波驛　竹内多聞

夕刊賣のぬくいお釣錢をきたながり

雨の難波驛、五錢を出したら二三枚の銅貨をくれた十三の子供、焦けるやうに握つてるたか、そのぬくさは、垢じんだ姿と共に暫くも付いて來て去らなんだ。句は他の日であつたが、そんな事から出來ました。

映畫から　青砥可明

夜。

月明。

噴水が紫の水〻噴いてゐた。庭先は畫の樣な明るさ、青々とした雜草が敷物の樣に滑かに光つてゐた。

「芳子さん泣いてゐるのか……」

「はい……女ですもの」

「戀なんかするもんぢやなかつたネ」

「……」

何處を何う來たか男と逢ふてゐる

友人の孝行　金津穂波

孝行は人の噂へ恐れ入り

此句が頭に殘つてゐる句です。自信らしい自信はありません。作句の動機と言へば友人に父を二十才の時に失つて今母と一緒に商賣をしてゐる嚴と言ふ人があります。常々の行爲に對して敬意を以て僕達は迎へてゐます　時々僕達が集つた時にその行爲をほめちぎりますと「冗談ばつかり、君こそ」なんて妙に小さくなります。それが或る日の作句の頭をかすめて通つたので、ふと作りました句が前のような恥しい句に出來上りました。

句の調子に苦心　渡邊桃太郎

石一つ落して龜は這ひ上り

句の調子に苦心する私として、自惚れてゐるうちの一つです。寫生吟であれば別に動機は言ふ迄もなし

車中吟　岸本水府

電柱は都へつゞくなつかしさ

名古屋から歸りの汽車中、關ヶ原あたりで大阪を思ひ、ふと浮んだ句です。間もなく博多へ行く車中、篠山吟葉氏に句を乞はれて、それを書きましたため、同氏の或るところへ發表された日記には、山陽線で作つたやうに見えてゐます。

古武士の生殘り　菊川泰平樂

第三大信丸(三千噸)の船に便乘して、今

大同江を下航しつゝあり。日露戰爭當時野津支隊が敵を攻めて、渡つたと言ふ鐵島を半廻して、載寧江に錨を下した。この船長は西南役に西鄕どんに從つて熊本城を取り卷いたといふ古武士の生殘り、白髮に獨逸式の顎髭を持つもコツケイなり。名を山口二平治とこそ申す若者も及ばぬ元氣さは七月の陽に燒けた体を、夕餉の食卓に浴衣を着こなしてサロンに落ちつく。

船長の黑さが目立つ浴衣掛け

善人姿

水谷鮎美

善人の姿で今日も暮れてゐる

動機。寢床に就いて幸福を希ふ心がすでに幸福です。今日一日の勤務のなかに、友と愉快に語らひ、老婆をいたわり、盲人の手を導きし事共の自分の姿をこゝろに寫しみるとき「善人姿」でなければなりません。總てに感謝せずには居られません。

善い日、善い夜　善い人は靜に眠る。

淋しい餘生

清水虛白

子福者と羨まれたる人なるに

動機、男盛りの子三人。皆人並以上の教育を受けて立派に獨立してゐるのに、たつた一人の母を見る者がなく、老い先き短い母は姉妹の嫁人先の世話になつて淋しき餘生を送つてる人の有樣を見て。

足りない人

酒井駒人

母だけが俺を人間らしくする

一昨年の夏、柳路兄と共に劍花坊氏を訪問した時「足りない人」と云ふ題が出たので作つたのです。別に動機はありません

彼の二言目

木村光卓

世間体國の資產の事も言ひ

あれが月賦に追はれて泣いて居る服裝とは何所から見ても見ぬなり。彼の二言目には國元の金の茶釜を語るなり。豈是を以て彼のみの言として聞流し得んや。

子供の生活

矢田冷刀

手枕を子供も眞似てそばに居る

子供の句に頓と興味のなかつた私にも子供が出來て、その子は今年四才になります。一日〳〵違つてくる子供の生活を見てゐると、思はず微笑まれる事の餘りに多い事に氣付きます。

右の句は數多い子供の句の內の一句です

早春の光り

長谷川一徹

春水に弟と石を投げて見る

久しく父の枕頭に侍して快復の喜びを見寸暇を得て幾歲ぶりにわが水邊を步む。早春の光り已に暖たかにして梅馥く。

ホヤ〳〵の句

川上三太郎

出來た時は何時でも自信があるのだが、活字になると赤面して仕舞ふ。ところで今出來たこのホヤ〳〵の句は左の通り

秋の味噌汁を名人感謝する

然しこれも川柳雜誌で活字になると顏が赤くなるかもしれない。いや大概赤くなりさうである。

丁髷氣分を愛す

堀口塊人

ひとり寢の枕の向きをかへてみる

自信と言ふよりも好きな句に候。野生は古風なる人間にて、近代的刺戟の强い句は作り得ず、丁髷氣分を愛し居り候。

鳩首會議

岡部美舟

亦何か起つたらしい顏が寄り

作句動機＝親友某宅を訪問した時、四五

人か鳩首會議を開いて居た。友人の勸めて居る會社は業績の振るはないため十年間に上役が變る事五度、其上役が創立當時から居るいはゆる家附きの娘の如き四五人を眼の上の瘤として嫉視反目、斷へず内訌が起るのです。其都度家附の娘連？が斯ふして對策を講じて居るのです。理屈になりますが御笑覽に迄。

修業時代

增位汀柳

折角の御懇書を頂ましたが、御存知の通りまだ〳〵修業の時代にある私には自信ある一句を選ぶことは大仕事です、御端書を頂いてから今日まで自句選をつづけましたが、やはりお答へする勇氣は出ません、これは決して遠慮からではありません、この事によりはつきり私の力を私が初めて知ることを得ました。自信ある句を出せと云はれゝばすぐ返事の出來る樣にこれから大いに勵むつもりです。

ノートから

三浦太郎丸

時計外せば戀人に逢ふ感じ

まだ修業中、自分乍ら面白いと思つた句より出來ません。最近のノートから一句撰りだして御好意に甘へます。

生けるもの滅死

佐々木三福

ふと觸れしそこから生命盡きはじめ

生けるもの滅死、いな生無きものにも廢朽がある、そしてこれらのものは世上の萬物と盡きせぬ關係を持つてゐる。一度吾等の指頭が之に觸れた時こん〳〵として其いのちの盡きはじめる事に何人も氣附くであろふ。

徹底諦觀

中川眼隱子

諦めた烏泊木の右ひだり

實感の句なら「おいそれ」で答もできますが、自信となると一寸暗い氣持がする程考へ當らない。この句は「烏」の題で作つた句です。甲の選者と乙の選者に或榮位を與へられてから幾分か自信を得るようになりました。然し入選即自信と謂ふのでありません、私の狙ひ處すなはち徹底諦觀が「泊木の右ひだり」に依て言ひ現せ得たからであります。

女給といふ名

前田五健

女給てふ名が呪しい戀もあり

至つて平凡な事だが、私の干係する或る野球チームの選手に戀人が出來た。熱は進む結婚談迄進んだ。私等は認めて陰乍ら圓滿なる芽出度い解決を祈つた。然し認めない人が二三人出來た。血統、性格、容貌申分なし然らば何故の否決ぞ。女給と言ふ名である。兩人が泣いたのは勿論其結果は語るに忍びない……之れが此の句の動機でした。自信はないが、實際です。

浮世なる哉

長崎柳秀

人は相思と見へぬお辭儀をし

人誰れか戀なからん況や青春に於てをや惠まれたるは樂しかるべし、然らずんば互に惱み琴瑟相和するを見れば轉々人生の無情を歎かん。去る者は日に疎しと雖亦相まみゆるの機なしと云ふべからず、そは一生の長ければなり。この時この際昔日の思ひ忽にして腦裏にひらめくを覺ゆべし、されど時既に遲く如何ともなす能はず、嗚呼浮世なるかな〳〵。

土の感觸

海野夢一佛

春から夏へ、夏から秋へ、而して冬が來ても、フレームの世話まで……種から……花……種までの花卉・今は蹴顏、それから菊、而して蘭なごになると冬のうちが一層手がかゝる。その手のかゝるのが

土に親しむ者には却つて樂しみなのです休むことに極めてゐる月曜日は勿論、毎日社から歸るのが二時、ペンを持たずに居られる時間が十分でもあれば、僅かな土へ下りて見る。その土の四季に異ふ感觸は土に親しむ者のみが知る快い感觸であります。春の土は和やかに暖かく、夏もたける程冷えて來て、秋の朝露にしつとりした土の肌ざはりは大理石です。紫に凝る蘭、やがて芳ばしき菊、黄や紫、白や紅の庭に、尻端折つてひょいと跳足のまゝで……(大正十五年八月作句)

土踏めば足の裏から秋迫り

暴君の出現

小林不浪人

汽車の音蛙をみんな默らせる

動機、若くして死んだ柳友今せい魚君の追悼句會の晩の事

蛙の聲を聞きながら頰杖をついたまゝセンチメンタル不浪人になりすましてゐた折しも一行列車が闇のすべてを壓して通る。蛙の音がハタと聞えなくなる、世の中には大低の場合に於て此の夜汽車の如き暴君が出現して、すべてのものを壓迫し去るものあるを、つくづく考へてゐるうち、又しても蛙の音が聞へて來た。此の句はその時ひよつと作つたもの。

給仕の餘裕

往夢遊

謄寫版給仕忙しいうちに刷り

この句は、あまり自信がありませんが、それでも自分としては、相當價値あるものと思つてゐます。誰でも自惚のない者はありませんからね。

給仕!!給仕!!大きな事務所にゐる給仕たちは、きのふけふ入社した連中にも、あだかも揶揄氣味の如き調子で使はれてゐます。その忙しさの中から自分の好きな本を讀んだり課長連中の棚おろしをしたりする餘裕を持つてゐます。月に何度となく刷る謄寫版もこの忙しさのうちに出來上ります。

病床斷食中

高橋月南

差別から一歩離れて神の國

川柳とは何うかと思ひますが、現代の私共には一日たり共差別階級から離脱することが出來ません。天國に昇つて初めて貴賤上下のない神樣に接し自分も神たるを得ることが出來る。死の至上主義を高唱した句でありますが、之れは昨年五月病床斷食中に作句したので、死に直面した體驗の句であります。皆樣の御批判を願ひたいと思ひます。

机上の時計

楊井二南

働いて歸れば時計止つて居

私等巷間に離隔たる都會人の家庭に於ける一景であります。終日の勤勞を脱して父が歸つて來ます。机上の時計が止つて居りました。母はもとよりその非を覺らぬでもありません、併し不斷なる生活苦を否定することが出來ません。噫、生を營まんとする人にして時なるものを忘却する事の幾多。父は宜しくその心事を汲んで母の罪を許すべきでせう。

大空に驚嘆

森里魚

初日の出海金粉が浮いたよう

動機、正月の元旦初日の出をスケッチしたまでです。

最近のもの

大空の廣さを誇る星の群

動機、星を主題として、夏の空(夜)晴れ渡つた大空に幾千となく目に入る星を見て……あの星、星自己をごう見てゐるか地球程でもないとしても星の多數を入るる無限大の大空に驚嘆した。

總選擧のビラ

山川草木

廣告の中に白紙を見付けたり

衆議院議員選擧の時でした。

二三枚握らされたビラの中に一枚の白紙を見付けましたので……。

獨立運動の最中

横山巷頭子

残念ながら自信ある句とか、會心の作とか御報せする程のものゝないのを淋しく思つて居ります。

私は朝鮮に在住してゐる關係上、內地の人々へ、ほんとうの朝鮮色ある句をお目にかけやうと心掛けて居るのですが、これは仲々むづかしい事です。朝鮮の言葉風俗、器物を道具に使つた句は澤山見受けますが、しつくりとローカルカラーのあるものは、容易に出來るものでありません。

日本人鐘路へ肩身狹く來る
鐘路はセウロと讀み、鮮人街の大通りです。一夜散歩の足を此所に向けて、此の國の人々が雜踏する中にもみこまれた時浮んだもので、其頃は丁度獨立運動とかで思想の惡化してゐる最中でした。かうした事は殖民地に住んでみないと鳥渡想像がつかないものです。

母の口癖

嶋田翠峯

母親は着物を買つておけと云ふ
「飲んだり喰つたりする金があれば着物でも買つておけ。それが身のためだぞ」それは歸國する度に母の口癖だつたが、僕は反いてゐた。悲報は問ひ言も出來ず母の死に面した。以來僕の生活にはその口癖が實現する時が來た。今迄の放縱な生活を後悔する身となつた。母の句を咏むやうになつた。作らねば母にすまない氣もした。その動機に母の「口癖」が素直に繼つた。初めは凡作と思つてゐたが今は自信の句と言ふより寧ろ母の遺訓として何物にも代へ難い一句である。

政略結婚の話

西本三笑

添うて見りやよいか知られ十七だ
小生の家庭は故渡邊霞亭にでもモデルとして見せたき位の、頗る渾沌たるもので昨年小生へ政略結婚の話の持ち上りし時未だ世の風潮にもまれざる女學生にてこんな家庭に伸び行くや、今より以上に蔓藤を生ぜんか一層結婚を延期すべきや一方十七位で性慾の解決を爲し得るや、年齢の差等々に心を碎きし折の作、作品と作者、年齢を歷然と知り得る句、又類句のなき點等よりして之れを以て(當分)自信の句とす。

二階借から

吉川啞人

居候こんな心で國を出ず
溪花坊氏主催の繪日傘句會席上で席題吟の時居候こそしてゐないが居候にひとしい二階借のふがいなさから生れた句。

技巧を弄せず

三條東洋鬼

見舞とはカステラ持つて來ることゝ
大正十五年夏、病氣の爲め舞子へ轉地した時の作。餘りに形式的な義理一片の見舞に飽き心から見舞を求めたる結果フト熱のある口をついて出た叫びが右の句である。必ずしも最も自信のある句では無いが、少しも技巧を弄しない處が私の句中最も好きな所以である。

三越の廣告

本田柳一路

三越の話晩酌聞かされる
「貴郎……」
「なんだい？」
「明日は日曜ネ」
「今日土曜だからな……」
「夕刊……見て？」
「アヽ、見たよ？」
「見たでせう！」
「何をサ？」
「知つてゐるくせに」
「うるさいネ、お酌をせないか』
「わかつたでせう？」
「明日が日曜と言ふ事……をか」
「妾イヤッ」
「何をおこつて居るの？」
「チョットこゝを見て下さいな」
……本年流行ウスモノ大陳列會—三越呉服店—なり。

柳樽評釋

廿四篇まで（十一）

麻生路郎

ふんごんですゝを取るのが且那也

すゝはらひといふものは、あつちでも、こつちでもあぶらを賣りたがるものだが、うんと力を入れてやつてゐるのは日那だつた。煤拂は極月の十三日に行つたもの。

ぶちまけて一一夕足にげる　炭俵

スケッチの句。輕い穿ちもある。斯うした句は、なるほど巧く詠んでゐるといふ以外に、人生に觸れるところが無いから句の價値からいへば大したものではない。『二足逃げる』と斷定したところが、この句の摑みどこなのではあるが、斯うした斷定は、よほどぴつたりしないと句の價値を弱めるものである。然しこの句の場合は、かなり巧な方である。

芋の皮でもむかふかと邪魔に成り

元日を控ての臺所の忙しさ。男手はもう空いてゐる。亭主所在なさに臺所へあらはれて『その芋の皮でもむかふか』といふ亭主の方では一トかど手傳ふつもり。女房の方では、さう

（七）三篇の句（續き）

料理人とぐうち鯉をおよがせる

料理人は片肌ぬいで庖丁をといでゐる。鯉は靜に泳いでゐる。それは嵐の前の靜けさである。死直面してゐる事を鯉自身が知つてゐるか、どうだか。考へて觀れば人間も又鯉に外ならぬ

かんざしでつゝ突き廻す三世相

女同士で、男女の相性などを見てゐるところ。寫生句。

「三世相」は佛敎の因緣說に基いてつくつた卜筮の書で、人の生年月日や人相等によつて十干十二支などの理を說き過去現在未來の三世の因果吉凶を示してゐる。此の書は安倍晴明が入唐の時、城刑山の麓で伯道仙人を師として金烏玉兎集を授かつて歸朝したのに始まるとも云ひ聖德太子の太占（フトマニ）の法に始まるとも云ひ、或は空海の占法に起源するとも云はれてゐて何れが正しいのであるかは分らない。

ごつしりと置いてからいふ臼の禮

いかにも臼らしいところがある。どつかにユーモラスな感じのただよふてゐるのもいゝ。自然の姿そのまゝが技巧となつてゐる。

でなうてさへ狭つくるしい臺ごころへ、大きな男がのさばり出て、その芋の皮をむいてやるから、その庖丁をこちらへ貸せと云つた始末に、反つて用事が殖えて困るといふところを詠んだので光景を躍如たらしめてゐる。

女房へ乳だ〳〵と押ッつける

抱きは抱いたが、すぐ泣き出されて、

『そりや乳だ〳〵』

と云つて、すぐ女房に押しつけてしまふのが亭主。輕い穿ち。

母親もともにやつれる物思ひ

娘の物思ひ、と云へば、おきまりの戀病ひである。金に困らぬお爺さんがめつたらなごいふモガさんの物思ひとは雲泥の相違である。

それと云ひ寄るすべもなく、日に〳〵やつれゆく娘を見るにつけ母親もともにやつれるより外に方法がなかつた。

こい取に一と杓たのむ花ばたけ

河豚は食ひたし、生命はおしゝの口で、花の美しさは愛でても、さて肥を自分でやるのは、あまりうれしくない。幸ひこい取が來たので一と杓たのむこころ。人拵がよく出てゐる。

鳴尾時代の葭乃なんかは、すつかり此の調子で花をつくッてゐた。隨分蟲のいゝ話だが、本人はそれでもいゝ氣持になつてゐるんだからおかしい。

禿來て鼻からけむを出せといふ

色と慾との吉原にも、斯うしたのんびりさがあつた。鼻から出したけむりをつかまうとするあごけない禿の姿が髣髴として眼に浮かんで來る。寫生句の上乘。

あまだれを手へ受させて泣やませ

ほつんほつんと、あまだれが落ちてゐる。何におびゑたのかなか〳〵に泣きやまぬ子を軒先につれて出て、そのあまだれを手にうけさせた。こどもの手の平には銀の玉が散つた。こどもは、いつの間にか泣きやんでゐた。

はらのたつすそへかけるも女房也

もしか戻つた時に寢込んでゐてはと、女房のこゝろづかひも上の空、明け方近くに、ごん〳〵叩いて、アゝ疲れたとそこへごろ寢をしてしまう。いそぎの用は兎も角も、好きな女に逢つて來て、あゝ疲れたもないものだと思へば思ふほど腹がたつて仕樣がないけれど、ひよつと風邪でもひいてはと、そつと裾へかけてゐるのも女房なればこそである。情味のある句だ。

寢てとけば帶ほど長いものはなし

寢所をへし折て置く一人者

ひとり者ほころび一つ手を合せ

一人者は不精だ。寢所へもぐり込んで足袋を脱ぐくらゐはなんでもない。帶までも解く。

さて朝となる。起きあがつたが、寢所を二つにへし折つて置くのが關の山。何處までも不精に出來してゐる。

たま〳〵、ほこびが出來ても、不精と不器用が、人頼みで生きてゆくのが一人者の常である。（續く）

川柳塔

○　庄萬よし

父親へ返事のハィは角を立て
計畫はいゝが馬力が續くかい
良心の飢を親友指摘する
下剃の方が一面讀んでゐる
父も來て折紙つきの選手なり

○　高橋かほる

妾宅の此の頃もめて空家賃
尺八を吹くは家内の身内なり
貧乏の姿小供に子ををわせ
蝶六の二重へ上がる太い足
洗いがみはっ筋の畫風が無し
洗はれて犬はも一度泳がされ
上敷の鋲を押してる病み上り

○　岩本素人

俺が巡査に成つた可笑しさ
買ふ氣ではないがこゝらの地價を聞き
淋しからずや後家の口紅

○　西本三笑

儲けたかそうかゞ兄は顎を撫で
兄弟を疎からしめた妻にして
生活る爲牛の鼻へも穴をあけ

○　松盛琴人

もう泣かぬ女ゞなつて身づくろい
終電車仲居のきつけ崩れてゐ
ぬかづけの味も手馴れた二十八

○　酒井駒人

國へ行く汽車を平氣で子守見る

死んでまで虚偽をさこられまいこする
つくゞこさこれば女強いもの
笑はせる氣でなかつたに母笑ひ

○　横田眠聲

其力左へよれば破壊力
金に縁遠しこ言ふてためて居る
はれゞこした氣預金をしてもごり

○　岩崎柳路

ピンポンの樣にはたいて追う螢
駒下駄のまんま尼僧は街へ行き
原版で見るこ可笑しな妻の顔
義務的な聲で車掌は次を呼び

○　竹内多聞

強かつた夢覺めた淋しさ

○　高見柳骨

人生をごうしやうこ云ふ酒の上
嫁入りに叔父が指輪を買つてくれ

○　檜山千代二

病吟

ままになれよこ遺書を書いたりす
病んでるれば夏帽部屋でやけてくる

○　橋本二柳子

涼み臺團扇を二本置き忘れ
手の平を見て今日の仕事の終りけり

四天王寺塔の下から月を見せ
鳩へ餌をやるのへ朝めし呼びに來る
汽鑵車の後になつてる女の子

◇　松丘町二

ジャズに狂へる逞しき足ら
二、2、II、ごれも夫婦の姿です
安心のならぬ世界に部下を持ち
耻しい癖ねこモダン夫人醉ひ
燈明がパチゝ鳴れり蚊の命
流暢に唄つて吃り氣が晴れる

◇　鳥田翠峯

唇赤ふキッス要求
中腰にかゞんで植木賞めてるる
薄つぺらな刺身こなつてしまいけり
釜をかすつて姉の行水

◇　水谷鮎美

自惚れのだんゞ手紙長くなり
乳母の家胡瓜の花へ灰をかけ
だまされて戻れば母はまつてるる
ふみしめて歩く愚鈍な戀をする
家出して巡査になつた面白さ
羽仁もこ子迎へる妻へ備へんか

◇　猪野燕柳

逢ふたびの喧嘩に連れはあてらる
すぐ歸へす刑事の口に乘せられる

◇　安西杏三

かすかなる望藥が又變り
力なく歩めば犬が吠ゑて來る
病人の仕事でないと叱られる

◇　長谷川一徹

こざ〳〵とした大阪へ飯りたし
仲人も別な寫眞をとつて居る
一生の思出と云ふ宿の良さ
うちかけが問題となり日を重ね
嘆かわしなどモンバリ見てるらし
子が出來て命へ保險かけました

公職を辭して

父ちやんはセルを素肌に着てしまい

◇　中島鐵洲

資本家の前に唇噛みしめて
避暑客に嘘の續く日もありて

◇　朝田新水

きゝわけて寢る子に母のない寒さ
順待つてゐても氣短かすぐわかり
熱心な仕事昏まで曲げる
よく見ればにぎり鮨屋に旗が立ち
愛敬もなく一杯で猪口を伏せ
若旦那掛引振りも親に似る

◇　楊井二南

先生の主義にインキが減つて行く
父の年母の年さへわきまへず
寢床から電信棒が晴れてゐる

新學長を迎ふ

學長へこの人ならとのび上り

◇　水田黄彩

懊惱を包む衣と知らずして
木の幹へほのかに血の氣感じたり

◇　村松曼平

拔擢へしばし反感續くなり
母親も戻つてからに呑めと云ふ

◇　中見光路

いふまゝに輕う燗けたがもめのもと
へそくりへ一圓たらぬ名古屋帶

◇　中澤濁水

即席の料理を客に敎へられ
轢かさせに來てと母親泣きすがり
日永さは火鉢に埋めた火が亡び
雨上り鳴りをしづめて露が落ち
辻褄の合はぬを刑事うれしがり
命により後れて坊やお辭儀する
捕鼠器賣り引つくり返るとこを見せ

粒々集

東京　川村花菱

あまりしつかりした車掌はこわい
出雲けん申し合はせた腕時計
誰れのこもつかず寄宿舎猫が居る
信じ切つた女房こ二人居てこわい
おごろきはある朝池に龜が死に
箱根細工の引出しの風
大きな屋根のある門を蝶流れ出る
ある日眞菁で坐つてた十六娘
傘の下油ッくさく通りぬけ
誰れに許す女なるらん美しき

御影　長崎柳秀

民政こみんな決めてる飲仲間
電球を有り丈け延す客の靴
タイピスト散歩の連れがよく更り
なまめかしい聲で集金斷わられ
妻もあり子もあり博士みじめなり
露宿す目にはきつうも叱られず
本妻こ妾手柄の違ふ丈け

松江　不二綱改メ　青砥可明

働いた樣に結核汗が出る
花道の暖簾は傘の儘くゞり
短冊にアッチを向いて居れこ云ふ
抱いた子にいつそ持たせる一文字
驛賣は釣りも渡してから臭れる
似合ふぞこ云はれボートを強ふ漕ぎ

魚崎　柴谷柴舟

こゝばかりは安全地帶枕がや
いゝ子でもないのに親は頻づりし

金澤　安川久流美

うとましや眼をわづらひて夜るを行く
ものいへぬ兒のわづらひに涙ぐむ

朝鮮　蛭子省二

二日酵軸かけかゝて薄着する
雷晴れに瓦寄捨して二度拜み
踏切で黑文字をすて子こ列び
廓ほこりの觀世音螢飛び

東京　富士野鞍馬

藝者たるものが特價品あさり
晝前の藝者姉さん被りで居
絮何センチ袖何センチに母困り

神戸　椙元紋太

きりぎりす鎧のまゝで息が絶へ
無精髭生やしてるるが常の顔
ほつかりこ給水船がへばりつき
水枕用事が濟んでぶら下り
やうくに產婆になつた顏つ付

猫の眼

大道鍋平朝臣

初めて洋行する者は、船がコロンボに着くと、きつと例の名高い寶石類を鵜の眼鷹の眼であさるにきまつてゐる。――もう既に新嘉坡でイカサマものをつかまされてゐるのに、性懲りもせずに――なぜと口幅つたいことは申すものゝ實は拙者もその定例に洩れず、まづは義務と思つてほんのちつぽけばかり買ひ込んだものである。

その中に一つ猫の眼石といふ頗る地味な寶石があつた。なるほど猫の眼石とはうまくつけたものだ。どこから眺めても、その眞中に一本白い筋が竪につくさまは、いかさま猫の眼そつくりだと最初はコツソリと一人船室で悦に入つて感心してゐたものであるが、印度洋を越した頃に、ふとその中央にあらはれる筋がちと斜になつてゐるのを發見した。ヤツしまつた。おれの新しい虎の子の猫の眼石は卽ち猫の眼には正に確に相違ござらぬが、たゞそれが斜視眼―藪睨みの猫の眼石だつた譯である。

たしか蘆花の小説に『黑い眼で茶色の眼こかいつたのがあつたと記憶してゐるが、これは私が伯林にねぐらをさだめてからもう大分經つてからのことである。

『日本人は早婚だと聞いてゐるのに、あなたはまあどうしてまだ奥さんをお貰ひにならないの？』

ある日突然私はK孃からこんな質問をうけた。この人の亡き父上は隨分長く日本にゐられた方ださうで、今でも家内中が大の日本贔屓で、その時もたしか一人の日本海軍將校がその家に寄宿してゐた。私もつい其の前に某氏に始めて紹介されたものであるが、すぐ其の日午後のお茶に招かれたのであつた。

『どうも日本には氣に入つたのがありませんので、遙々こちらまで嫁選みに來たわけなんですよ』

私は突差にかう圖々しう答へた。

『あら本當!!ねゝお母さん！嬉しい方ね、かうお馴染になつたからには是非一（わたし達でお世話しませうね……』

『ねゝどうぞ、何分よろしく……』

この時私はまづかういふより他に言葉がなかつた。
『ねゑ、あなたは一體どんな髪の毛のお方がお好きなの？……
それからどんな眼の色がお氣に召して？……』
さあ大變！これはひどいことに相成つた。
『あのね、こちらでは第一に髪の毛が條件になるのよ。白—赤—黑—茶—ブロンヅ——それから眼の色にも亦それ〳〵とすき好みがあるでせう。あなたは矢つ張り碧いのや、紅いのよりか、黑い眼の方がお氣に入るでせうね……』
さあいよ〳〵以てことだ。何のことはない、まるで犬の子か、猫の子を選ぶやうなものさ、いつそ
『では一つ三毛……』
をとでも茶目つて驚かせやうかとも思つたが、折角眞面目に、親切にいつてくれてゐるのにと、思ひ直して、をかしさを堪へながら
『まあ隨分とむつかしいものなのですね、では一つゆつくりと考へて見ませう、どうか何分よろしく……』
とお茶をにごしてその日は逃げて歸つた。
私はそれから以後決してもう二度と再び
『嫁さんを貰ひに來ました』なんていふお世辭？を戲談にも洒落にもいはぬことにした。
なるほどあちらの新聞の三行案内を見ると『求婚の部』に素敵なのが時々眼につくことがある。
『初婚女、年三十、髪毛チチアン色、眼色碧、ロココ式容型頗る美人、四十才までの金持男子と結婚したし、姓名在社』
なんていふ虫のよいのには思はず吹き出さずにはゐられない。
註に曰く『チチアン色といふのは、通な語で畫聖チチアンが好んで使つた色彩で、まづチョコレートに似た風な色をいふ
ロココ式といふのは佛國ルイ十四世時代に流行した名高い樣式で詰り上品な古雅なスタイルとでもいふ樣な意味にある。

× ×

『日本人は不思議な人種だ、——體よりか大きなダブ〳〵の服を着たり、足よりウンと大きな靴をひきずつたりする……』
なんてよくあちらの奴は吐かす——（實際その通りなのだが…）がそれが癪にさはるので、吾輩あの時思ひ切つて一寸初めは痛い位小さいハイカラな靴をこさへてはくことにしたと思ひ給へ
しかし初のうちは痛いの痛くないのて——おまけに歩道がかたい石疊ときてゐやがるので——頭のさきまでグワン〳〵響くやうな氣がする位さ。忽ち『マメ』が一合はごも發生した。しかし吾輩も猫であるぢやない、日本男兒であると、わが日本人のために痛いのを大に忍耐して跛をひきつゞけたものである。—石の上にも三年——そのうちにだん〳〵馴れて來てもう痛くもないやうになつた。やれ〳〵とホッとしたのも束の間、また候

急にチク〳〵痛くなつて來た。早速『セツロング』の上で、御自身で檢査に及ぶと、オヤ〳〵今度は『豆變じて魚の眼』となつてゐやがる。そこへ折惡くもうちの主婦がやつて來やがつた

『どうしたの？』

こんな場合婦人に失禮も糞もありやしない。

『こんなものが出來て痛い〳〵』

と足の裏を眼の前へつき出すと

『なんだ……そりや鷄の眼ぢやないの？』

『ねゝ鷄の眼だつて、日本ではこれを魚の眼といふんだよ』

『魚の眼!!日本人はよつぽどお魚が好きと見ねるわね、面白い〳〵』と獨りで喜んでゐる。

おしやべり屋さんはもうそれを鬼の首をとつたやうに會つた人々にそれを面白がつて報告してゐる。毎日日課のやうに閑つぶしに電話でお友達と話す時にも、いつものやうに

『何か變つたことがあつて？』

といふときに早速『魚の眼』一件を一大事とばかり報告してゐやがる。おしやべり仲間の門番の女までが、入口で會ふと、

『日本では鷄の眼の事を魚の眼つていふんださうですね？』

なんかんと不思議さうに吐かしやがる。

二三日して主婦のお友達のAとMといふヘツポコ女優が遊びに來た。何條この連中に報告を怠るべけんや。即ち『今日は』の挨拶の次に例の一件を御注進に及んだものと見ねる。間もなく吾輩の部屋へ挨拶に來た二人、さすがは職業がらなか〳〵最初から切り出さないが、いろ〳〵と世間話や、芝居の噂の末、とう〳〵その一人が

『ねねOさん！わたし足に鷄の眼が出來て弱つてゐるの、日本ではこれをなんていふの？』

そらいよ〳〵おいでなすつた。

『うん、それかい、日本ではそれを『猫の眼』つていふんだよ

『ねゝ『猫の眼』それぢやまるで寶石の名と一緒ねね』

『あゝ、さうだよ……』

少々話がちがふので面喰つたらしい一人は、早速私の部屋を飛び出して大聲でどなつた。

『E！（主婦の名）魚の眼ぢやなくつてよ！』

お臺所でカツフイをこさへてゐた主婦は、一は一大事とばかり鳩の眼のやうに眼をパチ〳〵させながら走つて來て

『ねゝつ!!ぢやなんていふの？』

『猫の眼だとさ！』

『なに猫！そんなことはありやしない……たしかに魚だよ、ねねO……』

この時吾輩莞爾としてこの憐むべき三女性を顧みていへらく

『日本では「ニヤーンの眼」つていふんだよ……ハヽヽ……。』

（一九二八、七、七）

光耀抄

○　霞乃

カルピスに若さをそゝる事も無し
老妻となりすましたる浴衣を着
すだれ巻き揚げても暑い大阪市
帆立貝人手貝など子に教へ
剰餘金出す腕なんご候はず
聞いて來た瀧は身の丈ほどにして

○　欣女

たうきびを岐阜提灯の下で食べ
田舍道母と歩めば露重し
口惜しくも夕日に賣つた家を見る

○　多喜女

蔓草のやうに育つて二十一
魂が燃へ上りでもしたやうに
ふりむかぬだけの強さが男氣か
いとせめて歎けと女造られし

○　武子

電車から葬式二つ見て歸り
我ながら後ろ姿の袖長し

○　壽枝女

八卦見のあれでは運もわるそうな
食川になるとも知らず鳩は肥へ
病上り着物にしわがついたまゝ
靜けさは雀の來てることを知り
よくなつた人に看護婦使ひに出

○　よし江

バルコニー上れば家の低い事
門口へ來てお友達笑ろて逃げ

○　吟女

嬉しさの鏡にこぼれ髪をすく
似てるくとまぶしうもみつめられ
泳ぐ子へふとおそろしい事思ひ
氷屋で母だけ一人宇治をとり

月評（前號）

路郎紋太
松郎山雨樓

近作柳樽　路郎提出

醉はされた其夜を悔いて
娘死に

志郎

路郎―落付きのあるい、句だと思ふ。句を纏める手腕も、相當認られるし、人生の或る一斷面を掴んで、しかもそこに同情的な感じのにじみ出てゐるのもい、兎に角これだけの句を纏め得られた事は、敬服に値ひすると思ふ。第一類句がないと言ふ事に於ても、この作者としての一つの歩み方だと思ふ。此句に對して、單に三面的記事として葬つて了ふ人があるならば、それは甚だ酷だと云はればならない。けれども此詩から新しい思想を受取る事はむずかしい。

山雨樓―僕は、此句にはも一つあきたらない所がある樣に思ふ。三面的記事として、顧られない樣な餘りに有り觸れた想に取られ易い缺點があると思ふ。第一「醉はされた」と言ふ上五からは死に導いたと言ふ程に、深刻な感じを呼び起し難い。即ち上五の表現が餘りに平面的じあると思ふ。又中七の悔いてと言ふ言葉も、や、説明的であつて、かうした事件的な問題を表はすのに物足りないと思ふ下五の「娘死に」と言ふ言葉も、説明を脱して居ないと思ふ。句全体を一氣に讀み下した表現から見ても、餘りに平叙的に墮して居て、それ程深刻な感じを表はし得て居ない樣に思ふ。

松郎―僕は此句に就いては路郎氏の評に贊成したい。山雨樓氏の評には、全部反對である山雨樓氏の評のうち、上五の「醉はされた」と言ふのが、平面描寫の樣で、深刻に生かされて居ないとのお説であるが、僕は寧ろ上五の「醉はされた」と言ふ齣は非常に複雜な場面が「醉はされた」と言ふ事によつて表はされて居るのは、作者の最もい、手法であると思ふ。それと上五の次へ持つて來た「其夜」と言ふ措字は、最近非常によく使はれて居る文字であるが、大抵の人の場合は「其夜」と言ふ文字が失敗に終つて居るのが多い、併し上五の「醉はされた」の次に「其夜」と叙してある點は、一句を通じてしつかりした中心になつて居る樣に思ふ。即ち「醉はされた其夜を」までは、非常にうまく纏つて居る。この點は作者としては、叙法に非常に苦心された跡が見ゐる。一讀した場合輕くあつさり叙せられてある樣であるが、自分等の作句体驗から考へても、これだけ複雜な事柄を、表面こんなに輕く、こなされて居る事は、非常に成功して居る樣に思はれる。次に「悔いて」「娘死に」共に説明の樣であると山雨樓氏は言はれて居るが、説明と言へば説明に違ひないが、こうした事件的な句を、よんだ場合の客觀句にはこれ位の説明は當然であつて、少しも差支へないと思ふ。若し私が、この句にも一つ慾を言ふなれば「其夜を悔いて」の後に「娘死に」と言ふ齣の連なりがどうか知らぬと思ふ。「其夜を悔いて」の次に「娘死に」と言ふ措字を見ると、叙し方が自然でない樣に思ふ。「娘死に」と言ふのが、少しとつて付けた樣な感じが調子の上に表はれて居ないか知らぬと思ふのである。然し此句としては之れ以上は無理だとは思ふけれども……

山雨樓―説明的な言葉であるか、どうかと言ふ事の意見に就いては、自から批評する者の感じによつて その響き方が違つて來るので

意見を異にすることは致し方がないが、此句は、どうも「説明川柳」を免れぬ樣な氣分がしてならない、强がち句の表現上の技巧手法に就いてのみならず、これ程重大な人生の一斷面を、川柳化するのに、餘りに樂に言ひ過ぎた觀がある。僕の希望としては、かう言つた場合には、もつとその嬢の心持なり、或ひは姿なりに就て、何處までも魂が、人を呪ふといつた樣な、凄慘さ、又は實在性を加味して欲しいと思ふ。いくら事件的に複雜な深刻なそして悲壯な事柄を取扱つても、それが人の魂にまで灼けつく樣な、表現を求めるのには此一句をものするだけにでも、僕は一年かゝつてもいゝと思ふ。さう易々と死ぬ程の大事を取扱つてはならない樣に思ふ。

山雨樓提出

盆栽の話で金は借らずに來

聽　松

山雨樓―一見常套的な感じがするけれども、人物の或るユーモラスな感情が句外に溢れて居るのを見うける。路郎氏の句に「金借りに行けば有馬の夏と聞く」と言ふ句があるのに思ひ當るが、こうした感じを叙情的に句に含ますと言ふ事は、川柳の持つ或る一面の特長でもあり、面白さであらうと思ふ。聽松氏の句では「轉りやあんな氣分になぜなれぬ」といつた樣に、主觀句とは趣きを異にして居るが、本提出句は川柳の面白味を、外さない所に特殊な味はひを持つて居ると思ふ。此句或は客觀句にも見られ、又主觀句の樣にとれるけれども、川柳の鑑賞として客觀句に見た方が一層引き立つて居る樣に思ふ。

松郎―此作者から見ては、之で纏つて居るのであらうが、もう少しうまくいつてある句が自分の心當りにも二三ある。それで作者としては、此の句は作者の過渡期の句として見られてもいゝであらうが（此時紋太氏出歴）之れに甘んじて貰つては困ると思ふ。心當りの句と言へば山雨樓氏の言はれた、路郎氏の句とその外に、句意は異るが「相談に行けば親類碁を圍み」（松郎）「間にも來いと綺麗に貸して吳れ」（蒼梧樓）此句原句は「綺麗な金を吳れ」であつたが自分は寧ろ金と言ふ文字を捨てゝ「綺麗に貸してくれ」とした方がいゝと主張した事がある。）の二句がある。それでかういふ句と、自句を對照して、作者は尙ほ向上せられんことを望む、此句は作者としては、他の句よりも物足りない樣に思はれる。他の「着馴れない笠きて物によく當り」とか「轉りやあんな氣分になぜなれぬ」と言つた句の方に惹付けられる、殊に最後の「轉りや」の如きは非常に感動させられる。

路郎―盆栽の話で云々と言ふ　この句の見付け所は一寸面白いと思ふが、大体の仕組が今までに言ひ古るされてある事は、松郎氏の説の通りで、自分もこの句に對しては面白い極く良い句だと云ふことには躊躇する、又ユーモラス云々と言ふ山雨樓氏の話があつたが、ユーモラスな點から行けば「着馴れない笠きて物によく當り」の方がずつと自然に流れ出たユーモアが感ぜられると思ふ。殊に此作者の郷土的な氣持が盆栽の句よりも「着馴れない笠」の句の方によりよく表現せられて居るからである。此作者の句としては、さつき松郎氏が賞讃された「轉りやあんな氣分になぜなれぬ」の主觀句が最も四句の中で優れて居てその次に「着馴れない」の句を置きたい、兎に角此作者は近來非常にいゝ傾向に出て來たことを自分は喜んでゐる。

松郎提出

末の子のためにと長女叱られる

木　三

松郎―此句は「長女叱られる」と言ふのは同情的に見た句の樣に思ふ。子供の躾けと言つた句であつて、家庭の一端を表はして、少しのびやかな句の樣に思ふ。併しもう一歩突込んだ見方が欲しいと思ふ。殊に「末の子のためにと」の「と」の字が調子の上に於てだれて居る樣に思ふ。併し「と」の字をとつて終へば句としては全体に崩れてしゃふのであるが、「と」と言ふ文字を置かずして「と」の意味を含ませて一句にしてほしいと思ふ。一見又「と」が調子を纏める爲に、冗漫であると思ひながらも、止むを得ず「と」の字を加へられた樣な跡が見える樣である。かういふ事は一般作家として、よくありがちな事で、こゝに叙法の推敲と言ふ事が、如何に重大な點であるかがうかゞはれると思ふ。

路郎―實感句であらうとは思ふけれども、なんとなく弱いと思ふ。それは末の子のために長女が叱られたり、末の子のために長男が叱られたりすると言つた場合の句は、從來にかなり見かけられたと思ふからである。即ち見付け所の新味が弱いと言ふ事が、缺點であつて、この作者としての實感が、少しく流れて居ると言ふ點に於て、私はこの句を拔いたのにすぎない。寧ろ句としては「熱が去り又俗物に歸つてる」の方が人間に對する嘲笑的な態度から眺めた句、又自分に對して苦笑禁ずることの出來ない、人間としての弱さを發見して居る「熱が去り」の句に興味を感じて居る。他の句で「僕ばかり怒る主任の氣が知れず」の句にしても、矢張り作者の人生に對する焦燥さが出て居るので、大變に面白く感じるが、この「末の子」の場合に至つては他の句程の、突込んだ見方がされて居ない樣に思ふ。

紋太―大体に於て兩氏の說に贊成致します。此句の持つ內容に思ひ到る時、かなり深い面白味を感じるが、間ののびた叙法が割合に感じを鈍くさせる、私もよく叱られる、或は笑はれる、と言ふ樣に「る止め」をよくやるが、かう言つた下五は、どうしても句勢にあるまぬるさを覺ゐさせる、それと言ふのが、その出來事と作者の心持ちとの間に、餘りに間隔が置かれてあるからだと思ふ。「之を叱られて」とすれば、少しは實際味に近付くかと思はれる。此の句としては「と」の一字は非常に重要な役を勤めて居ると思ふ。つまり此句の惜しい所はまぬるさを覺ゐさせる所に在る。

山雨樓―僕は此句に對する、叙法とか表現の如何といつた問題の外に、想に於て物足りなさを感じて居る。少しく柳論に涉るかも知れぬが、實感でありさへすれば、そして作者として面白い、或は珍しい、又は目新しい事柄でありさへすれば、川柳として一句纒めて見たいと言つた樣な態度は、僞はらぬ作句衝動であるかも知れないが、さうした感じを讀者にまで共鳴さすためには(共鳴さす爲の作句では無いにしても、共鳴して貰ひたいと言ふ心理が句作の上にこもるのは本當だと思ふ)餘程の感激と、思想を濾過したものでなければ、人を動かし難いものと思ふ。川柳を簡單に作り放すと言ふ事の通弊は、根本に於て川柳の句想を餘りに簡單な事にも、亦淡い感じにも求めやうとするといつた氣分に、鵜ひされて居るものと思ふ。さうした容易さが川柳を遊戯視する樣なことにも、傾き易いものと案ぜられる、句の表現、或は叙法といつた方面で、比較的淡い感じも、逢者に盛られる事があるけれども、表現の前にもつと〳〵深い鋭い觀察をすることを促してやまない。

路郎―今述べられた山雨樓氏の感想は、一般柳壇の作家達にとつて、わかり切つた事の樣であつて、實際はわかつては居ない人達がかなり多い樣に思はれる。之は多くの句を月々選をして居る私にとつては、痛切に感じ得る事であり、機會ある毎に、ある人々に對しては之を主張して居るが、却々徹底的に行はれ難い、それから實感でさへあれば、句になると言ふ、その事は一面眞理ではあるけれども先刻述べられた樣な點から主張すれば、實感必しも優れた句になると言ふ譯のものではないと言ふ事も、餘りにわかり切つた事であらうと思ふ。それから之もくどい樣であるが實感と事實との區別も、はつきりしておいて貰ひたいと思ふ。例へば水の中へ竿をさし入れた時に、之を見た人が水の中の部分だけ曲つて見ゐた、即ちさう感じた時に、感じた儘を句に纒めたとして、それは實感の句であるが、果して眞實の句であるかないかと言ふ事は、本當にそのものを科學的に研究したならば、曲つて見へる竿も、眞實は眞直ぐな竿であることが分る、故にもつと強くものを見、且つ感じる人であるならば、竿の眞直ぐなことを知る樣に、その物の外部から見た丈けでなく、その核心を摑み得るであらうと思ふ。句に於てもさう言つた事が必要で、なんでも事實ありの儘を寫生したから、句になるわけでもなく、又實感句であるから、他人の批評を許さないと言ふ譯のものでは勿論ないのである。この事は作者各自が、自分自身の句の境地を深く掘り下げて行くより方法はないと思ふ。

松郎―路郎氏の前說の所から受けついで、山雨樓氏の柳論が、此の句に當篏められることはどうかと思ふ。無論此句は山雨樓氏　言はれて居る樣な想でなく、句の價値の程度は私

が前に述べた如く、又路郎氏の言はれて居る樣な所ではあるが、此句は「僕ばかり怒る主任の氣が知れず」い句と同じ樣な感じの句であつて、客觀句ではあるが、句の心持は主觀が含まれて居るので、單に「末の子のために長女叱られる」と言つた表面的な想でなくて、此句から所謂子供にもかうして犧牲を負はされて居る事柄を、人生の一端として叙してある捨て難い想であると思ふ。之から見ても山雨樓氏の言はれた樣な、（さうこの句から長々とのべられる如き）缺點を見ないと思ふ。

川柳塔　紋太提出

月見草靴の埃は晝のもの

多　聞

紋太—とび〳〵に讀んで居るうちに、此句にぴつたり吸ひ付けられた、若々しい感じのする清新な句だと思ふ。

松郎—少し言ひ足りない點があるのか、僕は感興がない、もうしばらく味はさせて戴きたい。

山雨樓—僕は或る感じを受取ることが出來る。僕はかう思ふ、或る青年が月の出た晩に月見草の一杯生へて居る野原で、感傷的に思ひに耽つて居る、併しその青年の穿いて居る靴には、夜目にも白い埃りが溜つて居るのが見える。それは晝からの足の疲れ、体の或は心の惱みなりを物語つて居る樣で、如何にも寂しい、又痛々しい樣な淡い感じを受けとる事が出來る。又強いて艶つぽく解釋すれば、何だか女を待つて居る樣な場面をも、想像し得られるので、「月見草」といつた上ゝが大變にさう言ふ空氣を、よく言ひ表はして居る樣に思ふ　そしてさういつた感じを表はしたものにとれて、叙法に於てもよく練られてある樣に思ふ。

路郎—實に靜かないゝ詩だと思ふ。川柳は從來人事葛藤に重きをおいて居たために、やゝもすれば忘れられて居た境地であつた、かうした句も亦、川柳の行くべき道である事を示して居る。表現も亦それ等の内容を最も適切に盛つてある事に於て、この句を推奬したいと思ふ。

紋太提出

クツションを押し〳〵椅子屋喋べること

濁　水

紋太—僕の好きな句である。日常の些事と言つた樣なものを見逃さずして、それに表面何等の批評とか、感想とかを加へないで、その儘に寫生した句である。その表面はさうであるが實はその奥に平和な批評があり、感想がある、といつた樣な句は、私の思ふ川柳として、最も理想的なものだと現在は思つて居る。さうした句として、此句を推奬する、多分日常のつまらぬ出來事だと言つて、一笑に附する人がある事と思ふが、私はかう信じて居る。

山雨樓—却々一笑に附するに勿体ないと思ふ。僕等が川柳に這入つた時に、かうした句に如何に惹き付けられた事か、今思ひ出しても懐しく思はれる、前の聽松氏の「盆栽」の句でも同じ樣に、その人物なり、場面を想像すると、そこに人間的なユーモラスが立体的に活躍するのを見逃す譯には行かぬ。かういふ句境を發見する事も、川柳家の當然の義務であり、收穫だらうと思ふ。唯かう言つた主觀の餘り盛られてない、想は、その川柳家の進路として、滿足してならない境地だと思ふのみである。

路郎—紋太氏が此句を私の好きな句であると言はた事には思はず微笑を禁じ得なかつた。寧ろ濁水君の句だと言ふよりは、この句の下に紋太としてある方が、僕等をより以上に肯かせるほど、紋太式の强い色彩を出した句であると思ふ。尤もこの句だけが紋太氏の句境の全部であるとは言はない、と言ふのは「月見草靴の埃は晝のもの」と言ふ句を推奬する紋太氏であるから、色々の方面に鋭敏な感覺を働かして居られる事は、紋太氏の多くの句を見ればわかる事である。けれどもその中でも、特に「クツション」の句等は先にも言つた樣に、紋太式カラーのよく出た句だと思ふ。僕は山雨樓氏の言はれた樣に、此句の傾向から少しも出ないと言ふ事は困るけれども、かうした句に對しても非常に興味を持つて居る。近來川柳の味から、ユーモラスな感じが非常に稀薄になつた樣に思はれるので、絶ゑずその方面の事にも一言して居るが

相變らず、さうした方面の句が進出して來ないので、社會の反映である川柳である事を思ふ時に、さうした氣分が各人の心から離れて行つたのではないかと言ふ疑ひを持つて居る。多くの作家のうちには、さうした句が少いから、その方面の句は僕が拔かないものだと言ふ考へ方で、投句されないのではないかと言ふ事を考へて見る時がある。此句が特にユーモラスな句であると言ふ譯ではないが、幸ひこの機會を藉りて、多くの作家にさうした境地も、亦川柳の往くべき、一つの道である事を言つておきたいと思ふ。此句に就いては、僕は紋太氏と同樣に寫生句の上乘なものとして推奬して居る。

松郎―此句に對する路郎氏の說は、選者の立場をも加味されて、寸分のなきまでに言ひ盡されて居るので、批評の餘地がないのであるか、此句は前の「盆栽」の句と同樣で、從來から詠み陳るされた境地で、同じく作者の過渡期としての句であり、將來に於ては、作者自らも、その平凡たる事を自覺されることと信じて居る。それに對して路郎氏の批評は前に言つた如き意味で、拔かれたのであるから述べる事は出來ないが、紋太氏にして、かういつた詠み陳るされた境地を、僕よりも多く數を踏んで來られた立場で、尙且こゝに推奬されると言ふ事はどうかと思ふ、尙又川柳に於て、藝術に於て、理想的に最も確固たる持論をもつて居られる山雨樓氏にして、此句を推奬されることは、共に〳〵寧ろ作家に對して不忠實な批評ではないかと思ふ。この意味に於て、僕は餘りに平凡な句と斷定する。

紋太―もう一度申します。かうした境地を何時々々迄も續ける事に對して、そこに革新的な要求が起つて來るものと私は推しますが、勿論この句境許りが川柳であると言ふのではなくて、多聞氏の句なり、その他色々の句境に進むべきものである事は、言ふまでもないが、併し私はかう考へる、多聞氏の月見草の句の往き方、その他の句の往き方に、多少の消長があつても、川柳として、さして影響はないが、濁水君の句の往き方を、若し川柳から取り去るものとすれば、僕の思つて居る川柳は無くなつてしまふ程の影響があると言ひ得る。

松郎―僕はさう言ふ意味の事を言つたのではない、この句はもう詠み陳るされて居る事に氣付かれませんか、といつた樣な意味を云つたのです。句の行き方といふ事とは別問題です。

紋太―僕はかうしたユーモラスな寫生吟は、いくら繰返しても、古くなつても、良い味ひが津々として盡きないと思ふ。若し同じ材料を繰返すといふ意味の古さは、勿論排しますが、ユーモラスな見方を表現したものであれば、それは何度繰り返しても差支へないと思ふ。

路郎―僕は此句を見て、所謂類句といふものを思ひ浮べる事が出來ない、同巧異曲の句なれば、或ひは多數にあるかも知れないけれども、たとへていへば「挨拶のたびに、手拭肩を替へ」(古句)の如きが、それであらうと思ふけれども、さういふ意味で句を捨てゝ行けば先に紋太氏のいはれた樣に、今までに詠まれた川柳の大半は消はてなくなるに違ひない。さういふ意味でなくて、殆んど之と類想句でしかもこの句よりも優れた句が、事實ある事を例證されゝば、一言もないけれども、さうでない限りは、此句は立派に生かしておいて良からうと思ふ。(亂底・蓮郎記)

第二回豫約募集

漫畫大觀第五篇

滑稽文學漫畫

新古川柳・俳句・其他の漫畫化

(七月配本濟)

發行所

中央美術社

東京市外長崎町

八月一日〆切

一路集

【募集句】

丸髷

前田雀郎選

子が出來てから丸髷にくゝが出來　翠峯
丸髷のスツカラカンと晴れ渡り　東狂子
丸髷へ出入の者は惚れて見せ　風柳坊
丸髷じ疲れて藝妓歸つて來　南天
言譯に結つてる樣な母の髷　十葉
丸髷で出た日の使ひ手間がとれ　三次
丸髷の人と並んで亭主の氣　卯生
丸髷で來れば母校の愛想よし　正春
丸髷に結ふとバラソルはで過る　高峰
丸髷の斜に花を見上げたり　曼平
此の髮へ母丸髷を結はし度く　廻天童
丸髷のやゝ諦めを知り初める　寂郎
髮結ひがほめたを亭主恩にされ　美智坊
丸髷を叱つて見たい居候　青水
丸髷の花見へ子供借りられる　一笑
呑み込めぬまゝ丸髷は筆をとり　維茂介
丸髷を結へとたの聲になり　鐵洲
丸髷を結へ〳〵〳〵と新世帶　貴山
繩のれんでも丸髷は氣にかゝり　正吉
丸髷を大事に襷くゝらせる　琴人
乞食の子丸髷と見て二遍下げ　竹葉
丸髷が出ると孤兒院强くなり　水聲
押實りに丸髷今日も損をする　光路
丸髷に結つて箒を立てゝ掃き　仰天
丸髷がキチンと結へた艶布巾　同
本妻と妾手柄が違ふだけ　柳秀
奉る型で丸髷蚊帳に入り　同

五　客

丸髷へ一と櫛入れてたしなめる　翠峯
丸髷に結へば羽織も着て見たく　武子
あち向いてゐる丸髷の見つくされ　多聞
丸髷をしかと見屆く戀敵　志郎
電車で逢へば丸髷に結うてゐる　素人
(人)丸髷で來た姉におぢぎをし　賀名芽
(地)孤閨冷かに髷のみ美しく　萬よし
(天)丸髷に結へと主人が申します　突支坊

川柳家の戸籍調べ

□　係　ひろし生

(　)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)嫁ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

お馴染の戸籍調べを引きつゞき掲載致します。御照會申した向きは左記へ御返事下さい。

大阪市南區安堂寺橋西詰　安井寛宛

(157)　蛭子ます女

(一)えびす、ます女(二)魔十女(三)雅號や別號の必要は全くない者です　四)朝鮮光州(五)明治二十七年(六)妻(七)古句「汝等は何にを笑ふと隱居の屁」(八)今は奥さんですから名を指すは禮を缺きますが乙女時代の阪井谷子さん(久良岐翁の御令孃)性質が好きなのです(九)申上る資格なし(十)主人に萬事追隨(十一)第六

居眠

麻生葭乃選

驛名を聞いて居眠り亦眠り　苔香瓏
居眠の膝で小猫も眠つて居　新一郎
仁丹もおよばず喉重くなり　休歩
やけごまでして居眠をつゞけ　月歩子
居眠りを起されて居る古本屋　維茂介
居眠りの小僧へ墨を塗つて置き　秀郎
居眠をする程旅になれ切つて　幸泉
居眠りの懐中捕縄忍んで居　有陀
居眠りへ剃刀氣持よくさわり　貴山
居眠りの母はハツキリ見る白髪　東狂子
居眠りも蠅は容赦もなくこまり　錄山
要領のよい居眠は叱らせず　無心
居眠りを起して廻る入庫車　新水
居眠りの肩をたゝひてあみだくじ　正春
居眠りの丁稚邪剣な聲で醒め　孤舟
修身の時間の眠い春の風　珍狆
居眠りを向ふの店で笑つてる　一風
居眠りがこのまゝ寝たい返事なり　三次
居眠りのそのマチ針に醒まされる　京郎
いねむりをまぎらす様な耳掃除　柳狂
居眠りの新聞どうに落ちてゐる　卯生
面白い芝居居眠る兒を起し　一笑
來賓の一人居眠りよく目立ち　高蜂
居眠りは電話の鈴に彈かれる　多聞
湯にひたりつゝ居眠る旅にして　樂居

居眠りを課長はそれとなく起し　東狂子
居眠りを起してやるも三等車　耕民
居眠りへたゞセコンドの音ばかり　美碧坊
居眠りの丁稚へ急な用が出來　翠峰
居眠りの譯は親爺も知つてゐる　阿形
居眠へ社長笑つただけであり　迷羊
慾徳も人前もなく眠つてる　穂波子
看護疲れの母の居眠り　素人
針仕事女中へ書のつかれが出　冷笑
留守番の小僧居眠るまい事か　賀名芽
居眠りへ朋輩悪い智恵を出し　陽亭
居眠りも出來ず御客も來てくれず　春公子
御歸宅を知らず居眠り恐れ入り　千鳥
居眠りをして同僚に冷やかされ　菊路
御辭儀する様に附添居眠りし　一舟
居眠りをこよりの先きでつゝいてみ　柳人
居眠のおんなごころばかり縫ひ　壽枝女
居眠りの氣もち丁稚は考へる　琴人
居眠りへ寄る母親の有難さ　風柳坊
お土産をあてに居眠りなら待ち　光路
運ぶ針よつぽ　眠い動きやう　黄彩
居眠つて背からバナヽ落して居　虚白
居眠つてるてもかんでる口の豆　露路

項通り(十二)蛇料理、早死等々(十三)申上る資格なし

(188)　岩本武子

(一)岩本武子(二)ナシ(三)ナシ(四)京阪沿線香里(五)明治廿四年(六)ナシ(七)何と言ふても主人の句がよく見へます(八)下ぶくれの顔、町の娘(九)ありません(一〇)三味線(但し引けません)、畑を作る事、旅行(申す迄もなく二人で)(一一)呑み助の素人と言ふのが一つあります。(一二)仕舞風呂(一三)昭和二年九月

(189)　杉原吟女

(一)杉原きん子(二)吟女(三)別にございまん(四)尼崎市別所村四五〇番地(五)明治三十五年七月二日生(六)有りません。(七)澤山ございまして申上げられませんが、どこか淋しい女らしい句が好きです母性愛のあふれた句、それから多喜女様の句も大好きです(八)ハキ〳〵して居て出しやばらない女、ウエーブした洋髪も好きですけど可愛い結わたの下町娘のおけいこ歸りの姿もたまらなく好きです.

本あけたまゝ居眠りの續くこと　突支坊
居眠つて重役太いどこを見せ　泰平
居眠りの膝爪立ちに猫が來る　白鷗
居眠りのまたも一枚書き汚し　晃卓
居眠りをするにはすこし明るすぎ　粹犴
笑われて居眠してた事を知り　志郎
居眠りの針は表に裏に出る　觀月
ハンモック圓本顏へあてたまゝ　鮎美
居眠つて編物の目を又數へ　仰天
居眠りになつて新聞借りられる　竹葉
居眠りへ按摩話を續けてゐ　竹馬人
身の破滅まで居眠つた轉撤手　菱明
膝頭抱いて黒案のまゝ眠り　吉朗
居眠りが電話へ出ると切れた跡　水聲
いねむつてゐましたといふ疊もと　千代路
居眠つた頁へ涎れしみになり　廻天童
惡口は止せと居眠り伸びをする　萬よし
居眠りがよい奥樣になつて居る　武子
急停車居眠ゆれたまゝで居り　正吉
居眠の丁稚を起こす客が來る　同
居眠りの又も同じどこをよみ　吟女
はし持つたまゝ居眠りあごけた　同
居眠りの癖を案じる初奉公　伴内
居眠りの母に親父の長い酒　同

居眠りに大阪も過ぎ京も過ぎ　柳秀
居眠つたことを詫びてゐ助役室　同

佳作

居眠を隣りの客は持て餘し　柳秀
居眠りに鍛から棒の返事され　京郎
居眠りへごいた〳〵の夜具が來る　光路
居眠りをほつたらかして飲み續け　翠峰
木戸錢拂ふて居眠りに行く　素人
居眠も窓あけて見る急停車　新水
居眠りを叱る母親床をのべ　正春
居眠りへ帳場の筆が伸びるなり　孤舟
結構な話睡魔に襲はれる　綠之助
居眠りも聞いてた樣に口を入れ　鐵庵
檢札へ居眠り少しむつとする　太路
居眠りのもう耐へきれず横になり　雪峰
床屋褒めた迄は居眠り知つて居り　玉仙
臺所ひそかに夢を逐ふところ　淑郎
居眠りに氣付いて話切り上げる　同
(人)居眠りが追つ立てる仕舞ひ風呂　伴内
(人)うつ〳〵としてゐるの音を聞き　與詩夫
(人)居眠りは顏を洗ひに座をはづし　眠聲
(地)物尺に嫁居眠を持たせかけ　鐵洲
(地)こゝからが居眠つてゐた針の跡　青水
(天)妬く聘もた居眠りの疲れ切り　光路

美しさよりも感じのよい女(九)こてもそんな句なんかございません、あまり厚かましい樣でお恥しい樣な氣が致して居る許りです、でも一生懸命作り度いと存じて居ります(一〇)美人畵、成園樣千草樣のを見るのが大好きです、わからないのに和洋音樂、讀書が好きです(一一)人の子の母でございます(一二)新しがる方、きぎる方、おし賣り(一三)昭和二年六月

塚崎松郎先生より

(190)　安井欣女

(一)安井きん(二)欣女(三)月見草(四)大阪市南區安堂寺橋通り一ノ四三(五)明治三六・一一・二〇(七)「大股に歩けど心配の去らず」ひろし(八)身ぎれいな清楚な感じのする親しみのある方、洋裁もごちらも好きでございますがあまりけば〳〵しいのは嫌いでございます(九)涙なら互の胸に通じあひ(一〇)あみもの、讀書、琴、野球見物(一一)ひろしの妻(一二)酒に醉ふ人、信仰のない人(一三)大正十五年春萬よし川柳に始めて投句「講義きく軒に雀の子を見つけ」水府氏選に入る

錠前

◇　春魚選

白い手がそと錠前へ觸れる音　琴人
錠前をしかと下して逢ひに出る　綠之助
錠前の數を思はす腰の鍵　志郎
別莊の冬へ錠前ふやすなり　鮎美
錠前をかけて留守の子本をよみ　伴内
一把の錠前一すみわけかね　鄉川
錠前が冷ねきつてゐる霜の夜　菱明
錠前を下せば倉庫暮れかゝり　曼平
錠前を三十日にかけたまんまなり　玉仙
錠前を今日は女房の鍵であけ　孤舟
みそなはす筈を養錢箱の錠　京郎
靈泉となつて古井戸錠が下り　新水
日曜の家に錠前だけ殘り　美智坊
藏屋敷錠前の音寒う聞き　耕民
背戸の錠忘られたまゝ錆びて行き　泰平
御用金きつちり錠がおりる音　維茂介
錠前が狂つたまゝの子の金庫　風柳坊
陽の前に錠を見出でゝ平和なり　多聞
錠前のピンとはねてるいゝ日和　同
錠前の一つ一つの型を待ち　東狂子
悔い改むるこゝろ手錠がもぎ直り　同

河野春魚
中野柳陽　共選

今更の顏で錠前見つめて居　柳秀
嘗請塲に錠がかゝつてお朔日　同
錠前へ燭臺の灯がゆれてゐる　翠峰
錠前の外に留守番たのまれる　同
錠前へ父は手付を見られてゐる　同

俳作

錠前の音で名刹黃昏れる　光路
錠前を信じて赤い灯にしたり　孤舟
錠前を閉めて女房の咳をきゝ　白鷗
錠前の大きなとこに一人居る　綠之助
馬曳いて戻れば錠が下りてあり　素人
若葉曇りに錠前の錆のしめり　多聞
錠前を固く守つてひがんでゐる　寂郎
(人)錠前へむなゝ歸る空は晴れ　小蓬
(地)錠前の垣より奥は神さびる　菱明
(天)錠前の一つ息子のまゝにせず　光路

キザな言ひ方が許されるならば「錠前」の選は六十七人の出句者のうちこれだけの選句だから、かなり嚴選といつてよい。「錠前」の含む川柳味があまり固定しすぎてゐるために ほとんどが類句——即ち若夫婦と錠前泥棒と錠前、人間の智慧とそれ、掛取、共稼、

(191)　畑田よし江

(一)畑田よし江(二)ナシ(三)ナシ(四)浪速區惠美須町二ノ一五〇(五)大正三年五月十七日(六)學生(七)お嫁入どなたも〳〵いゝ姿(八)しとやかな上品な女性。(九)卒業して桃割の日が續く事(一〇)俳句、短歌、讀書、オルガン、三味線(一一)未だ子供です(一二)魚類と現代式にカブレル女(一三)大正十四年の春

(192)　松盛壽枝女

(一)松盛壽枝(二)壽枝女(三)なし(四)此花區上福島南三丁目六六(五)明治三十六年十一月十六日(七)まだほんとに分りませんが先生の句は私には少し堅いやうでかほるさんの句は私に分りよく松郎さんの句は滑稽味が多分にあるやうに思はれまして皆それ〴〵好きです(八)背丈は中脊より少し高い方、顏立少し丸形、目鼻立パッチリとよく澄んだ整つたもの、なるべく洋服に似合ふタイプが好きです。(九)ありません(一〇)植物、小動物、小鳥類、俳句、和歌(一一)有(一二)雷大嫌です(一三)昭和三年二月頃より

來訪人とそれ等々――であつた事が この結果を生んでゐる。

佳吟七句はとりぐに面白い。今の僕の氣持では綠之助、寂郎、多聞君の三句が好きだ僕は如何にも人間らしい人間を描いた句、それから感覺の新鮮で鋭い句に 共鳴してゐるからこうした句には惹かれ易い。他の四句もそれ〴〵にまとまつてゐる。(人)の句は空が晴れてむなしく歸つたことを表し得てゐる。氣持もよく出てゐる。(地)の句は平凡だが取材がかはつてるのと 神々しさを頂戴した天の句は僕等のねらひたがる句境だ。この行方もすでに型にはまつてゐると いへない事もない。しかし他の句と比べるとき僕はやはりこの句を天位に置かざるを得なかつた。

◇ 柳陽選

錠前も共に自轉車盜まれる 正吉
(佳)人の世に錠前の入る怖ろしさ 耕民
藏屋敷錠前の音寒うきゝ 同
教會の下駄箱〃して錠がおり 廻天童
(佳)錠重く闇に土藏のうずくまり 高峰
猛獸の檻を封じて錠一ッ 菱明
(佳)錠前の垣より奥をのぞさびる 同
錠前のピンとはねてるいゝ日和 多聞
錠前は大丈夫だと云つた樣 同
錠前をかけてハンドル引て見る 鄕川
朝までを金庫の錠が持つ使命 草明
反杭もせず錠前の捻ぢ切られ 同
頼りない錠がついてる貯金箱 仰天
錠前が錆びついて居る非常口 賀名芽
錠前が飾りの樣な支那鞄 柳狂
作業服この頃鍵の音になれ 迷羊
(佳)別莊の錠前の只さびしくて 同
(感吟)錠前を裏向にして女出る 素人
生き甲斐は手錠の味も知つて居る 阿形
(佳)鍵穴の氣になる今の心持ち 同
(佳)錠に の要らぬ男のマタ醉で 黄彩
借りて來た隣の錠でヤット開き 光路
猜疑心一ッの錠へたより過ぎ 一舟
誓願の心に錠をかけて置き 有陀
舶來の錠前別な樣に言ひ 山
番犬の鎖を解いて錠をかけ 同
手提金庫錠が狂つて持ち廻り 幸泉
悔ひ改むる心手錠が向き直り 東狂子
(佳)錠前をこしらへたのも人間 京郎
錠前は責任のある音で開き 孤舟
(軸)神殿を瀆して賽錢箱に錠 柳陽
稻米と名を改めて錠が要り 同
燒跡に鍵のかゝつたまゝの錠 同

選後に

人間の智慧錠前を頼り過ぎ 其象

ついに此の句の上越す感吟に接する事の出來なかつたのは淋しいものでした 應募句數の夥だゝしい丈けそれ丈けに。只感吟と見た素人氏の句、女子の心をピタリ指して許さず一分のすきを與へないのは流飲を下げるに充分でした。六、二

御打粉
匂ひ入り
松風
本舗 伊藤大一堂
發賣 高橋盛大堂
到る所の藥店化粧品店に販賣す

迎へ火のあとで——

—(これを特に川村花菱氏に讀んで頂ければ本懷である)—

川上三太郎

門口でお迎へ火を焚いた。白い煙が縷々と伸びて軒先から松の樹へ、それから直ぐ前の海で盡きて消へて仕舞つた。私はふと父の事を思ひ出したのである。

◇

父を名人と呼ぶ事を許したまへ。私の死んだ父は小さな金槌で煙管をコツ〳〵打ち上げるしがない職人風情だつた。然し晩年から死後にかけてそのこしらへた煙管が、同業者は元より、袋物商、骨董界に珍品として取扱はれ、貴重品として賞玩されて居るのを見聞する時、私は泌々その不肖の子である事を痛感する。

◇

父は松の樹が好きだつた。また父は味噌汁が好きだつた。晩年の父が偶々休みの朝、私たちと一緒に朝飯を攝る時のその口許を今でも私ははつきりと眞似をする事が出來る。就中父は初秋の味噌汁を愛した。

秋の味噌汁を名人感謝する

◇

父は午前五時といへば既う床を離れて居た。冬の日なぞにはまだ眞暗だ。女中部屋でさへ白河夜船である。その中で父は仕事場に膝を立て、只獨り電燈をひねつて、小さな金槌を手にするのだ。仕事場の次の間には弟子たちが十四五人も寢て居る。然し父はそれをガミ〳〵起すやうな事は決してしない。やがて靜かな中からコツ〳〵、コツ〳〵といふ槌の音が響いて來る。奥の土藏の中で母や弟と共に枕を並べて寢て居る私が、何う

かするとフト眼が覺める事がある。その時此の槌の音が聞へて來たのだ。その槌は私の耳と胸を打つのだ。私は此の時ほど總て人間は父を愛さなければならぬ――と思つた事はない。

◇

さてその金槌の音で弟子たちは起きるのだ。弟子たちは流石に訓練されて居た。コツ〳〵と五六度槌の音がすればみんなパツと眼を開いた。そして忽ち昂奮する。見る〳〵一齊に嗽ひ手水。裏の車井戸がガラ〳〵鳴る。それから十四五の金槌が一遍に鳴り出すのだ。一寸壯觀である。其から私達の朝飯が始まる

◇

此の槌の音が如何に深く私の耳に殘つて居たかを本年遇然私は知る事が出來た。それは名古屋のJOCKで放送をした日である。私は名古屋に私の父の弟子の一人が震災後移り住んで居る事を思ひ出した。だがそれは名古屋市中區板橋町とだけしか知らなかつた。さうしてその板橋町といふのを探して行つて見ると何でも四丁目か五丁目位まであつて迚も丁目と番地なしでは知れさうもなかつた。その日は生憎雨が降つて居た。私は白晝とは言へ冬の雨の蕭々と降る中を彼方此方と板橋町を彷徨した。一時間許り――フト私は槌の音を耳にした。聞き覺へのある槌の音だ。懐かしい調子だ。私はその音を便りに一軒の家を叩いた。そして表札に父の弟子の姓名を見たのである。江戸で生れて東京より外知らなかつた此の老ひたる弟子は悅んで私の手を取つた。

◇

父は午前五時から十一時までしか仕事をしなかつた。彼は自分の仕事に就いては朝の陽の外絶對に存在を認めなかつたのだ元來父は夜業を悉く嫌つた。職人は職工ぢやねえ、夜なべをする奴は誰だ――斯んな叱言をよく弟子たちは言はれた。然しその人も晩年仕事場に膝を立てゝ居る姿の、如何に衰へたかを見ながら私は暗然として學校へ行つたものだ。

仕事場に名人肩がこけて居る

◇

父は明治四十四年十月十六日、私が北支那天津に居る時死んだ。父は無筆だつた。また父は全身に一杯文身をして居た。此の二つが老ひたる父をして自分の家に風呂場を作らせ、七藏で獨り弟の小學讀本を讀ませた。父は死ぬ一週間程前に支那に居る私に遙々手紙を書いた。それは父が恐らく一生でたつた一本、總ゆる人間の中でたつた一人私へ宛て書いた手紙だ、半紙一枚の右の肩の隅の方に、絹糸をはき出したやうな弱々しい一字がでこぼこにたつた七つ並んで居た。

しつかりしろよ――。

◇

だが爾來、私はうつかり――して居るのである。

秋風の中をつらぬく陽の行方

古句質疑

蛭子省二

五月號に今川狀は永享元年と書きましたが、これは無論活字本に因つたのである。孝經樓漫筆に、今川狀は了俊應永十九年に書たる也版行の本に此年號あるすくなし。本は此年號あり、今の本には永享元年とあるは其時の今の寫しで年號をしるせる也、とある。訂正して置きます。序に附記する。

初節句　武道でつひに勝利なり

理齋隨筆に、今川狀の最初の ケ條に、文道をしらずして、武道終に勝利を得ざる事とあるは、了俊の名言也、と室先生歎美せられたなり。いかにも武道ばかりにては、天下永久に治ることならず、亂れたる時は武を以て治れる時は文を以てす文武は車の兩輪の如し文武は是天下を治る道具也、ことに日本は武勇すぐれたる國なり、すでに人王のはじめを神武天皇と申奉るを見ても、武德を仰ぐ處しるべし。と、此の一章を應用した古句は多い。

船で切る髮は千尋の命綱

質疑者　久　水（東京）

航海業者には今でも此の事が殘つて居るそうです。此句を說明するに好都合の記事が擁書漫筆に在りますから、その儘拔記致しましよう『海をわたる舟難にあふ時は、船人頭髮を斷て龍神にたむくることあり、今も讃岐の金毘羅大權現、常陸の安波大杉大明神などには、頭髮を斷て奉たるがいとおほかり、こは西蕃にまねびしわざにて、發辛錄讃續集上卷、海船頭髮の條に、漱浦楊師亮航海至大洋忽天氣陟黑。一青面鬼。躍入舟中。繼有一美婦人至。顧左右取頭髮。舟人皆辭以無。婦人顏鬼自取之。即於航板下。取一籠啓之。皆頭髮也。婦人棟數來而去。ム々加藤咄堂氏曰く。海上に風波激しく船將に覆へらんとする時には、舟人ども口に海上守護の神として祀りる、讃岐の國象頭山金毘羅大權現の名を唱へつゝ髮を切りて海中に投じ、又は自己の身代りとすべき所有物を投入れて其安全を祈るも亦人身犧牲の變化せしものにあいざるか身命を供せしものが身體の一部となり終には其の所有物を以て身代りにするはかゝる習俗變化の歷程なり。と。

舟人の祈願するは住吉大明神、觀世音菩薩、八幡大菩薩、近世に至つて金毘羅大權現である。『上州草津溫泉道中續膝栗毛』に

彌次「コウおめへ此の頭のまげのいくつもあるに、コリヤどふす　のだへ。　こんぴら「ソリヤハア、金毘羅樣へあげるのでござらアもしうらハア下總の船頭でござるが　アニハア去ッ難風にあつて、すんでのこと船もふつけへるべいと思つた程のこんでござつたアが、其の時金毘羅樣のうおがんで、せめてコレ命べいもたすかりたいと　アニハアみんな髮のうおつきつて願のうかけたら　コレきかつしやい、金毘羅樣アありがたへさう〳〵助すかつたものだアから……

これから例に因り話が佳境に入る、就てお讀み下さい。

○

東京の柳友から弘法大師石芋の傳說に就て尋ねられたが、自分も數年前調査しようと思つたまま打過して居る。幼少時に眞言宗布敎所の附近に住み、百萬遍にいつては石芋の話を聞かされた事があつた。

大辭林に、石芋、草の名、あたたかなる地方にはゆる草にて、根に芋ある物なり

毒ありてくふべからず。

言海に、石芋、芋の一種、苗さといもに似て光澤多し、暖國に自生す、食ふべからず。クハズイモ、マンヂユウイモ。野芋。とあつて他の辭典も類した解說がついて居る。緣日商人の口上通り食當り、胸のつかへ、宿醉などに効能ありと言はるるのも尤もで、我茂の事であると云ふ和漢三方圍會に、自中華處處來、又自流球亦來。擇出皷凋者、爲薑黃。と明和年中に琉球から渡つたものだそうな。在田野中、三月出苗、其莖加饑大、高二三尺葉青白色長一二尺大五寸、以來頗類蓑荷五月有花作穗黃色頭微紫根如生薑。而茂在根下、似鷄鴨卵、大小不常とあつて良否の區別をするに芋に與へ食はざれば薬るのである。

屁のやうな遺恨で芋のいしがへし
末世まで弘法芋のいしがへし
皆石になつたで屁にもならぬ也
すゐきの涙高野では芋をひ
芋と妹鰻と佛意で石となり

日本傳說集に半田良平氏の報告がある。

『昔弘法大師が諸國を遍歷して岩代國會津あたりへ來て、とある百姓家で里芋の煮たのを乞はれた、主人は吝嗇な男であつたと見ゐ、弘法大師の服裝も屹度粗末であつたからでもあろう。これは石芋だと云つて與れなかつた。すると大師は水を乞はれた　主人は水もないと云つて矢張また與れなかつた。大師は何にも言はずに其處を去られた、其跡で主人が里芋を食はうとして見ると、石のやうに固く成つて食べられず、其上家の周圍には水が一面に湛よつて百姓屋敷は島のやうに成つて了つた。また峠か何かの茶屋の婆さんが、石芋だと云つたと云ふ話も、小供の時分に聞いたやうな心持がする』

此種の傳說は處々に殘されて居る事であらう。茨城縣筑波郡足高　は觀音樣で石饅頭を小供の土產にして居る。それは一人の乞食坊主が腹がへるから饅頭を施して與れろと店頭で嘆願した處、强慾爺は之れは石饅頭で食べれぬと追拂つた。乞食坊主は弘法大師で饅頭が悉く石になり、後から造つたの迄も石に化したと云ふ、今土中から出るが殘りであると傳へられる。

武田氏が週刊朝日に發表せられたのに因ると、伯耆の倉吉在關金溫泉は弘法大師が再興せられ、巡錫の歸り老婆の芋を洗つてゐるのを見て芋をくれといつたが與へられず『世を救ふ我に與へですき甘き苦き辛きを後の世　知れ』と諷されたと傳へられ『食はず芋』は今尙ほ湯谷に繁茂して好事家の興を得て居ると云ふ。

石芋に二度目の僧のおそろしさ

質疑句がたまつてゐますが、二頁を限度としてお答へ致す事になつてゐますから氣永にお待ちを願ひます。

川柳雜誌合本特賣

本社では新しい讀者諸君の御希望に依り合本を作りました、總布製美麗表紙附（金文字入り）で書架を飾るにふさわしい簡素な裝禎です。此際左の値段でお須ちします本社事務所まで御申込下さい。

第一卷及第二卷　金五圓也
第三卷及第四卷　金參圓也

苦吟か快吟か

庄　萬よし

君と僕とそしてビールと櫻ン坊　路郎

の中七が・『キリンビールと』であつたのが一月を經て、そしてビールとに訂正せられた。

枯枝に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉

は最初烏のとまりたりけり、であつたがたりを削つて前句に訂正せられたのである。弘法は山門の額を書いて掲げて見ると、一つの點を失念したのに氣が付いて墨を含ませた筆を投げ鎗の格好で投り上げると掲額は美事に完成せられた。

旅順港口で福井丸の閉塞作業を終つて端艇に飛び乘つた中佐廣瀬君は、兵曹長杉野氏が居ないのに氣が付いて、閉塞船へ後戻りして捜索中に敵彈に見舞はれて、船と共に海底の藻屑となつた、と同時に軍神にもなつた。

◆

よく人が苦心の傑作と言ひ、傑作の苦心とも言ふ、私はそれを否定するものでない。併しこの傑作を生んだ苦心を苦痛とか苦惱とか七轉八倒とか言ふ文字で表すべき苦心だとすることには、考ふべき餘地が殘されてある。言ひ換へれば傑作への苦心とは、念には念を入れる、砌磋琢磨、勇猛精進、完全なる燃燒等の文字で表すべき苦心であつて、局外者から見る如く苦痛とも苦惱とでもなく、況んや七轉八倒の苦しみごころとは、そこに苦心の甘さもあれば悠々自適の悲壯美も發見し得るものがある。

◆

例へば

二階を下りてどこへ行く身ぞ　路郎

夕顔は打ち上げられた濱で咲き　青明

すき透る水にばつ突き當り　信子

この道や行く人もなく秋の暮　芭蕉

働けど働けど我がくらし樂に

ならざり　じつと手を見る　啄木

吾が神吾が神何ぞ吾れを捨て給ふや

キリスト

何れも孤獨の淋しみもあり、妥協し難い個性の叫びもあるが決して人生への否定でないのみならず苦心の中に一派の滋味と自適の悲壯美の流れてゐるのを觀取することが出來る。

◆

更に傑作をぢつと味はふてゐると、苦心や煩悶を超絶して燃燒の跡も精進の跡も洗ひ清められて、そこには作者の持つ澁味や、矜持や更に一種のプライドをさへ

まざ〳〵見せ付けられるものがある、かくの如き傑作を苦吟と言はずして快吟と言ふのが適當な文字であらう。

俺は彼を馬鹿にしてやらう　路郎
若旦那樓敷に一人放つとかれ　五葉
ほんに長旅だなと雲思ひ　莢豆
よいとこへ砥石の尻がきまるな　紋太
目出たさも中位ひなり俺が春　一茶
旅に病みて夢は枯野をかけめぐる　芭蕉
痰一斗へちまの水も間に合はず　子規
あゝわれ世に勝てり　キリスト
法華經のためにこの臭き頭を刎ねられんことは砂を黄金にかへんに等し　日蓮

悲語なく一の大言なし。愚痴、繰言、罵詈　ごの小人に用ひる文字の影だにもなく、玲瓏玉の如く、高風霽月、澄み渡つた大空の心境は、崇高とも懐かしいとも言ひ様のない朗かさに打たるゝものがある。

◆

傑作への道はアルプスに上るが如し、怠けものやおごけものには許されないが、さりとて苦虫を嚙んだやうな渋面では山靈の罰ででも山頂を極めることは出來ない、登山はトリックではなく歩一歩の精進である、而も莞爾とした微笑と希望の鞭きとで踏み登るべき天下の公道である

（七・一〇）

軍配の句に就て

森　東魚

柳雨翁の時代川柳大觀巽見の中（五二二）軍配をひつくりかへすおん扇子

此の句の軍配を秀吉或は信玄を匂はしたものゝ如き御解釋であつたが、此の塲合は特に誰を指したものではあるまい。「軍配」は要するに「敵の戰略」と云ふ意味であらう「某の配に從つて」なぞゝ指圖の意味に用ひられる塲合がある。五本骨の金扇の馬標即ち徳川家康の馬標の扇が敵の軍配團扇をひつくり返す、打ち負かすと云ふので、軍配團扇を扇に對照したゞけの狂句仕立て、徳川家を讃したに過ぎない。……。

再び「往診と來診」に就いて

岩本素人

私が『往診』と『來診』を混同してはいけない。と言つたに對し、東洋鬼氏が『來診』の塲合でも『往診』と言ひ馴れてゐるから、混同はしてゐるが、散文でない詩としての川柳の塲合は差支はないと言はれたそれに答へて私は、往と來と

を混同して使用する事は、たとひ韻文の場合でもよろしくない、オーライとは言へない。と言ふ事をこれから書くのであるが、事の序に問題から少し斗り脱線する仕掛けになつてゐる。

鶴の飛んでゐる畫は軸や額でよく見受けるが、古畫の多くと言うより皆と言つてもいゝ……は飛んでゐる鶴の尻尾か黑く描かれてある。けれども鶴の尾は決して黑いものではない。黑いのはその手羽の先端である事は、鴻池の女婿を覗くまでもなく解り切つた事である。それだのに何んで畫に限つて飛んでゐる鶴の尾か黑いかと言ふに、筆者が實物の鶴を見た事が無いからである。地上に立つて居る鶴の尻尾か黑いものだから、飛んだ鶴も矢張り尾が黑いのであうっと言ふ想像から飛んでもない尻尾を描いてしまつたのである。

由來日本の畫家は甚だしく馬鹿らしきまで傳統を重んじたものであつて、假りに狩野派すれば、狩野派ハ型と言ふものが傳へられてあつて其流派を酌むものは、それから一歩も出る事が出來ないのである。偶々異才でも現はれて型を破りでもしやうものなら、外道と稱して直ちに宗家から破門をされたものである。丁度本願寺の異安心のやうなものである。だから昔の畫學生の修業と言へば、師匠所藏の自派の扮本を丹念に模寫をする事が其全部であつた爲に今の樣に寫生をあまりやらなかつた。新機軸を出さうなんと言ふ考へは思ひもよらぬ大それた事なのである。日本のルネサンスと言はれる明治末……大正の藝術的覺醒期迄は斯う言ふ風な沒個性的な因襲が續けられて來たのである。だから鶴を一羽描くにしても實物に就て研究する譯ではなく、唯々自派のお手本のみに依つたものであるから、初めに間違つた鶴の尻尾はいつまでしても黑いのである。

それなら、白かるべき筈の尾か黑いから其畫の有つ藝術的價値はゼロかと言ふに、決して決して左樣ではない。香りの高いものは尻尾の色を超越して矢張り結構な藝術品なのである。鶴の畫ハ尻尾が黑くても、佳いものは良いのと同じで『往診』と『來診』とを混同してゐても詩的價値には響かない。良い句は矢張り佳いのであつて、私の言つた『選に入つた句は皆自分の句以上に佳句である』とは皮肉ではない。惡いものを良いと言ふ事に依つて、より惡い意味を含ませる。風の皮肉は由來私は大きらいである。私の『球を突いてゐる』句は只往診の句見本のつもりで引用した迄で更に他意はないのである。

尾の白い事を知らないで描いた畫は、それが黑くても繪畫としての價値に障りはない如く東洋鬼氏の言はゝ樣に『御往診を願います』と言葉は度々聞き馴れて居て不思議とも間違ひとも感じて居ない作家の句といつてのみ『往來』の混同は

問題とはならないのではあるが、讃家が一度飛んでゐる所の鶴を目撃して、今迄の讃か間違つて居たと氣付いてから後も尙依然として從來の如く、尾の黑い鶴を果して描き續け得るであらうか？

こゝが問題の焦點である。

往はゆく　來はくるで正反對である表と裏　黑と白の相違に等しい。東洋鬼氏の『小學校を卒業した程の人間なら全部知つてゐる』であらう程の判然たる字義の相違なのである。

其區別を承知しつゝも尙且つ平氣で間違つた言葉　使つて居ると するならば、取りも直さず、尻尾の黑くない實物の鶴を知りながら尾を黑く描く所の讃家であつて、これは許されない事であらう、と言ふよりも、作家自身の爲し能はぬ所ではあるまいか。

東洋鬼氏の『地方語を以て民謠を作る』と言はれるのとは塲合が違ふ。地方語とは方言訛であつて、白いものを黑いと言ふ風な間違ひではない。又『散文の文法を以て韻文を律してはならない』事は子規及び東洋鬼氏の言を待、迄もないが韻文だからと言つて白い所を黑いと謂つても差支はないとは思へない。

私が申す迄もなく川柳の味は甚しくデリケートであつて『往診』が間違ひだからゞ言つて、それを『來診』に入れかへたらいゝかと言ふに必ずしもさうではない。反つて入れ替へた爲に句の價値を損じる塲合もある。紋太氏の

往診を見送つて出て咳一つ

の塲合に、往診を來診に代へて

來診を見送つて出て咳一つ

とすれば何だかおかしい。だから、私は往診を來診に取替よと言ふのではないから誤解のないやうに願いたい。『往診の醫者を見送つて出で咳を一つした』と言ふ文章は東洋鬼の言はゝ樣にであるがこんなシーンを川柳にするのであるなら『往診を見送つて』と言はずに『醫者を見送つ』てと言つた方がよくはないかと思ふ、間違ひがなくて『往診』の題意に欠けてゐる。これこそ題に拘泥し過ぎる因襲から知らず識らずに陷られた紋太氏もあらうお方の千慮の一失でがなあらう。それから東洋鬼氏の

往診へ折の刺身の事も言ひ

此の句は大阪の柳人にも『往診』で可いと言ふ人もあるが、私はこれも『往診』を『醫者』にしたらどうかと思ふ『醫者』丈けでは往診といふ題に欠らないと言ふなら『來た醫者』とかしてはどうか

來た醫者へ折の刺身の事も言ひ

來た醫者がいけなければ何となり御隨意だが『往診へ』はちとおかしい。

（昭和三、七、九）

往診問題へ

大橋かい痴

七月號に於ける東洋鬼氏の往診問題の御意見を御伺ひしても判る樣に御二人の說は既に議論とか研究を通り越して皮肉の贈答になつて居る樣に思はれましたので甚だ殘念に思ひまして厚顏にも第三者の私が飛び出しました次第で有ります。

醫者から云へば『往診』で病家から云へば『來診』だと云はれる素人氏の御說は全く字義通りの解釋で、中學校の入學試驗にでも出たら無論滿點でせう。（是は決して皮肉ぢや有りません）

所で東洋鬼氏は是を反駁するために『病人が熱を出しましたから一度御往診を御願ひします』と云ふ言葉を度々聞き馴れて居る世間も亦其れが間違ひであると知りつゝ混同して使つて居る。故に世間及び時代に生きて居る東洋鬼氏は少しも恥としないと云ふ御意見の樣に拜見いたしました。是も至極御尤もの御說と思ひます。

なる程近頃では『往診』と云ふ意味が院外診察と云ふ意味に轉化した樣であります。現に私は今日も醫者の所へ往つて『先生は？』と尋ねましたら相當の年配である藥劑師までが『一寸往診に往かれました』と云つた位いです。

所で東洋鬼氏の云はれる如く實際『病人が熱を出しましたから御往診を御願ひします』と云ふ言葉がそんなに迄聞き馴れて居るでせうか？又そんなに迄世間が混同して使用して居るでせうか？是は私が一寸疑問に思ふ所なのです。そこで私は私の參考迄にかゝりつけの醫者の所へ行つて聞いて見ました所が醫者の答も矢張り『御往診を御願ひします』と云つて來るのは餘り無いと云ふ事でした。

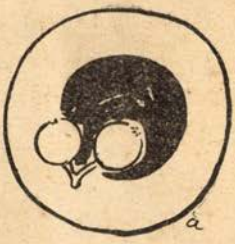
謝絕つて置きますが私は決して東洋鬼氏の字句の揚足を取る積りで斯んな事を聞きに廻つたのでは有りません。私自身が解決に苦しんだので研究したに過ぎんのです。

けれ共前述いたしました通の往診と云ふ意味が診察に往くとか診察に來ると云ふ意味よりも院外診察と云ふ意味に轉化しつゝある事は事實であつて唯是れを醫者を前に置いて使用するかせぬかゞ疑問なので有ります。

往診云ふ語を院外診察と云ふ意味に使用して居る場合は醫者へ直接に云はぬ場合が多からうと思ひます。

そこで六月號の東洋鬼氏の拔かれた十一句の往診ですがあれば矢張り院外診察醫と云ふ意味で、來診で無ければならぬと云ふ理由は有らまいと思ひます。

唯私は東洋鬼氏が往診、來診を世間の人が混同して居ると云はれましたので就きまして、決して世間は混同して居らぬと云ふ事を申上げ樣とした迄に過ぎません。



各地柳壇

川柳雜誌社　七月例會

七月六日防空演習の夜日本橋倶樂部に例會を催す、燈火管制に先だち停電騷ぎなどあつて早く散會。此月より當〻幹事を定めて會の進行に便ならしめた。幹事素人、加香、ひろし、二柳子記）

（出席者）

路郎、信一、一杉、入專、正吉、稔、伊佐美、山雨樓、文蝶、伴内、三次、源坊、幸泉、迷亭、風柳坊、貴山、竹本、眞壽夫、新水、多聞、孤舟、虚白、ひろし、琴人、かほる、月下、雅流、雅幽、柳狂、丸葉、革郎、素人、加香、翠峰、柳人、翠川、不滅、蒼梧樓、惡源太、露斗、亂耽、鶴峯、双葉子、二南、三笑、紋太、武子、松郎、萬よし、二柳子

兼題　鯛　路郎選

一匹の鯛を重たくさげてゐる　二柳子
魚島に家相應な鯛を呉れ　双葉子
鯛飯へ婦人倶樂郎の智慧を借り　伊佐美
レンコ鯛花嫁も出て酒をつぎ　萬よし
吉日の鯛の姿を亂さない　二南
鯛買ふて今日の暑さを氣にしてる　愚陀
鯛網の藝者一人が禮に來る　武子
折の鯛脱んだだけで座を外し　柳人
魚屋は値切ると鯛を又かへし　幸泉
家主は鯛借家は鯛を買ひ　源坊
束れ髪値だけの鯛を見て歸り　伴内
會席へ鯛樣々に變り果て　陽喜亭
貧弱な皿へ盛るなと鯛思ひ　かほる
同じ鯛ごりりとならぶごらやき屋　萬古
鯛提げて潜り戸狭う戻つて來　多聞
鯛の身の堅さ餘生をつゝましく　山雨樓
鯛までつけて鬼婆の手にうつり　松郎
鯛もむなしく恪氣つのりぬ　同
本鯛を買ふて夕餉のちとはやく　雅幽
折の鯛値ぶみしてから燒直し　同
先づ父の箸から鯛がくづされる　同
父病んで鯛のさしみを嬉しがり　琴人
鯛も見て小あじな女房買つてゐる　同
（佳）いゝ鯛と云ふのへ鍋を抱いて　同
（佳）結立てを氣にして鯛はまだ燒ず　加香
（佳）醉ふてみる鯛の眼玉もにぎやかに　山雨樓

席題　トラック　紋太選

トラックに一家八人養はれ　路郎
トラックへ寶船程乘りすまし　かほる
トラックの戻りは輕い音になり　孤舟
トラックの一番上に妻の物　不滅
轉宅へトラック尻を向けて來る　雅流
一臺のトラックで着く本三荷　双葉子
トラックの中に繩切れおどつてゐ　雅幽
トラックに乘る軍閥はチトいがみ　萬よし
電車から見ればトラック踊つて居　稔
トラックで巡査を運ぶ一大事　ひろし
トラックが來て道修町狭うなり　風柳坊
トラックにチト危げな橋があり　伊佐美
トラックにゆつくり積める世帶なり　三笑
トラックへ積むパン食へる思ひ　貴山
トラックのはいりきれない町へ越し　同
トラックの餘儀なき道を廻らされ　一杉
トラックの夜は涼み臺見て通り　同
トラックにとまつて堀の生きてゐる　松郎
宗右衛門町をトラックおびやかし　同
（佳）トラックは仲仕の助手でゐる　月下
（佳）トラックの田舍から來たよそ　孤舟
（佳）トラックの助手は法被で汗をふき　不滅
（佳）トラックが着く加勢が二三人　双葉子
（佳）トラックに澤庵石もつみこまれ　琴人
（佳）トラックも使ふて居るよ大きい　萬年青
（佳）トラックに愛犬を呼ぶ眼がなし　二南

席題　婦人記者　迷亭選

號外に關係のない婦人記者　松郎
短篇の方でもうかる婦人記者　源坊
婦人記者肉身ほどに聞いてくれ　蒼梧樓

内幕の暗さを　婦人記者話し　亂耽
婦人記者口紅の濃さ氣に掛けず　愚陀
獨身で通す氣で居る　婦人記者　翠峰
婦人記者きわどい事も云つてのけ　琴人
ハンカチを忘れて歸る婦人記者　かほる
夕飯をおごらしてゐる婦人記者　双葉子
婦人記者殘るところは賴んで來　二南
婦人記者急所を外すまいとする　同
婦人記者こと面倒になると辭め　路郎
ゴシップに自分のもある婦人記者　同
（秀）婦人記者ならば奥樣會ふ氣なり　紋太
（秀）婦人記者來てから社内よくもめ　素人
（秀）遭難の男を寫す　婦人記者　雅流
（秀）婦人記者うまくいつぱい椅子を引き　亂耽
（軸）三度目の茶を誘はれる婦人記者　迷亭
婦人記者待つ間をやをらコンパクト　同

席題　詰襟　山雨樓　選

詰襟は徹底的にやるといふ　多聞
詰襟が似合ひます　八專
野暮な僕には詰襟が似合ひます　ひろし
丸刈にして詰襟の心よし　亂耽
詰襟の帽子正しく朝を出る　紋太
詰襟の釦はづれてゐて睡り　迷亭
詰襟になる七月の重役　源坊
詰襟のきつしり時間には戻り　稔
詰襟の父へ末の子親しまず　革郎
詰襟で來ても此苦が分るかい　山雨樓
（軸）詰襟の父をいらひと思つてゐ　選

席題　防空　互選

防空の話しまひは逃げること　風柳坊
輕氣球ロープ切れたらなと思ひ　正吉
町の子がはや防空のまねをする　丸葉

味方のか敵のか一機高く飛び　迷亭
爆彈が何だと地下のコックなり　萬よし
高射砲賴母しそうに空を向き　孤舟
防空デー敎へる親がちつまり　革郎
防空に晩飯はやく濟んでゐる　二南
防空の氣持ち眞つくらやみに知り　鶴峯
高射砲一發皆をうなづかせ　稔
防空に大阪中が空を向き　素人
烏今日人のすること嗤つてゐ　多聞
防空に仕事れつから手につかず　三笑
防空の闇を仰げば星が飛び　一杉
彌次馬を防空演習持て餘し　柳笑
防空で少しもうけた蠟燭屋　惡源太
血の若さ防空デーに落ちつかず　菅梧樓
防空は防空美味い西瓜なり　かほる
防空をばるかに今日も逢ふてゐる　松郎

席題　物干　互選

物干を物置にする二階借り　柳狂
物干で指さされた散つたきれ　正吉
物干で見る大阪の鉋い空　愚陀
物干もおんなじである八軒家　萬古
物干で相場師空を讀んで居る　八專
物干で見るべからざるものを見る　菅梧樓
物干へあげても丁稚間に合わず　雅幽
だらしない女が見ゐる物干　翠川
物干の下に汚い生活なり　亂耽
物干で朝の空氣へ延び上り　文蝶
遠方の火事を物干うれしがり　三次
物干へはやビルヂング陰を見せ　貴山
物干に隣の屋根がつかへてゐ　琴人
物干でそのまゝ寢たい風が吹き　伴内

物干で見ると屋根なげ賴りすぎ　三笑
物干でビールの栓が落ちた音　二柳子
物干を降りると矢張り汗になり　二南
物干で世の行末を考へる　山雨樓
くしやみしてから物干をみんな降り　迷亭
物干もまつさらですと家主云ひ　ひろし
物干で辛棒しろよと夕涼み　萬年青
二階をば貸して物干とられて居　幸泉
物干にお互ですと裸なり　柳笑
お隣りの物干竿の落ちる音　一杉
物干の籐椅子少し早すぎる　同
物干の古さに馴れて物干している　孤舟
物干の向ふに見ゐる故郷の山　同
梅雨晴れの物干だけに干し切れず　新水
花嫁のもう物干へ干してゐる　同
物干でゆうべの寢言からかわれ　稔
物干で女中の身にもなつてみる　同
物干へ風呂屋の煙り落ちかゝり　翠峰
物干へ涼みに行けば曇つて來　同
火事を見に出ると物干搖れるなり　源坊
物干でゆうべは屋根が漏りました　同
物干へちよつと〳〵の新世帶　革郎
物干の上に世帶の色を見せ　同
物干へ母は團扇を持つて來る　かほる
どや〳〵と來て物干へ吳座を敷き　同
家賃六圓屋根あり物干あり　多聞
物干へ出ると生駒も見へてます　同
物干の空を圃の窓で見る　同
物干で男は顔をよせてゆく　路郎
物干のしづくとなつて暮れてゐる　同
物干で奉公にゆく子と談し　同

「京阪神」社友句會

七月二日夜心齋橋筋心齋橋食堂で京阪神社友懇談會を開く出席者は路郎主幹、二柳子萬よし、素人、ひろし、京郎、二南、琴人、舟々かほる、双葉子、加香、多聞、柳骨、翠峰、革郎三笑の十七人、悟郎氏は差支へで句のみを送つて來た。日本料理でうちくつろいで久々に水入らずの歡談に夜の更くるを知らず散會したのは十一時過ぎであつた。

夜　路郎選

日中の熱さを話す夜の街　二柳子
夜の氣へ殘るは若さばかりなり　二南
二日醉電燈がつくと目が沓える　三笑
夜遊びの丁稚銘仙着てるなり　翠峰
極道になれても夜はねむからう　加香
いさかいのまじり〳〵と夜が更け　琴人
鳥打をまぶかに夜の人となり　ひろし
この姿夜なればこそなればこそ　革郎
まけて置くやうに電氣は宵をつけ　多聞
教へてる方が夜中に戻つて來　柳骨
夜を呪ひ晝を呪ふて髭が伸び　萬よし
來客を今夜迎へるふき掃除　悟郎
（軸）職人へ寐たよ〳〵と取り合はず　路郎

川柳雜誌社　糸屋町句會（大阪）

六月十二日夜　於博物館　川合舟々報

兼題「愚」　ひろし氏選

結局は愚を返へしたことになり　松郎
偶然を命の親と思つてゐ　舟々
愚人の前の五圓に風があり　赤城
盆暮を見舞ふて足りる愚であり　陽喜亭
愚人へ沸へ湯を呑ます四疊半　毒仙
愚人の溜息きいてから逢はず　馬行
愚人へすまない浴衣肩がはり　三笑
先代の愚を女房輕んずる　孤舟
愚は愚とすでに言葉は冷たかり　琴人
報恩もできず音信するばかり　觀月
愚にきせ伯母一升だけ貸してくれ　百鈴
實の親心を鬼にして歸へし　源坊
謝恩會少し恨みも云ふて見る　蒼梧樓
死ぬまでも忘れぬ愚が横を向き　吉朗
愚にきて淋しさせまる膳の上　鮎美
零落の我に返つた親の愚　新水
愚人は我が身の上も知つてくれ　同
撞取した上に愚を着せられる　素人
愚知らずと云はれ小金を貯めてゐる　同
愚あつて長屋へ夫婦寄れて來　冷笑
愚に着せてゐるのが父は腹が立ち　同
愚を返へしに髭で來る　刀三
淺猿しい人間へ説く犬の愚　同
（軸）御愚に着ますとは水くさい女　ひろし

席題「警察」　互選

警察を貧弱に見る前科者　刀三
警察と隣り合せに住みなれて　翠峰
警察へ面目なくも友を呼び　舟々
警察へ來ても勝つたは憑びれず　蒼梧樓
警察の世話にはならず生きてゐる　赤城
石段で一つ突かれてはいる警察　ひろし
警察の小言に女將なれたもの　冷笑
警　察にもやさしい言葉　武子
警察の庭にいみじく咲き亂れ　毒仙
鞍替へに來た警察の小さすぎ　新水
警察で責任のある返事をし　孤舟
警察は細かい音の響くとこ　琴人
警察でいつもの聲が出てくれず　一醉
警察の門で子分が待つてゐる　賀名芽
警察を出て公園に足が向き　同
警察で思つた程に云へぬなり　双葉子
警察へ行くのに着物きかへてる　同
警察でもう叱られるのへ落ち　鮎美
貧相な男拘引されて來る　同

席題「ちり取り」　互選

隣りの門も掃いてちり取り　舟々
ちり取りへほかす鼻紙舞ひ戻り　翠峰
塵取りの中に子供の欲しいもの　源坊
ちり取りの柄に小僧の汗がしみ　義情
塵取りのパコンと云ふて塵が飛び　蒼梧樓
閉場へ給仕ちり取りうばひあひ　里一九
ちり取りを持つ女房へたそがれる　毒仙
ちり取りにはつきり嫁の埃がある　刀三
腹立たしさを下女ちり取りに向け　惡源太
塵取りへついでのごみをつまんで來　一醉
行儀作法を見習ひのちり取り　赤城
ちり取もきやしやに自ら掃き給ふ　ひろし
喧嘩見て來てちり取りを入れ忘れ　馬行
むさんこに盛つた塵取りこぼしてる　新水
忙はしさの掃除ちり取り見當らず　同
ちり取りを叩いて亭主をあやし　久郎
不意に來た風にちり取り向をかへ　同
ちり取りを亭主が持つに念を入れ　松郎
ちり取を持つおろかさを叱られる　同

川柳雜誌社
神戸支部

水無月句會

楊井二南報

六月拾六日夕、四宮神社々務所で例會を開く涼風室に滿ち大いに作句を助く。珍客として英豆氏を筆頭に大阪から迷亭、鮎美、觀月、里十九、愚陀の諸氏を迎へる。神戸の出席者鎌月、一孝庵、亂耽、志郎、華水、ひでを、呑山、竹風、岳靜、小蓬、嶺月、山都、紋太、東洋鬼、一狂、素生、睡花、ひとし、むつみ、伸、完二、二南。

席題「博士」　一狂選

博士今日戀の日記を燒き捨てぬ　愚陀
博士氣輕う浴衣になつて虫を聞き　鮎美
座蒲團を敷くと博士は猫脊なり　鎌月
博士から聞けば壽命があると云ふ　二南
友情を博士おぼにて居たいなり　睡花
演壇の博士英語を言ひ直し　素生
世の中の事を助手から博士聞き　迷亭
博士にも成れず眼鏡の度がすゝみ　東洋鬼
和折衷に博士が住んでゐる　紋太
何事か博士は思ひ續けて居　小蓬
のんびりとある日博士の一家族　同
院長も副院長も博士です　嶺月
博士またズボンのボタン掛け忘れ　同
ドア閉めた後の博士に音がなし　亂耽
土耳古帽博士は亭の方へ行き　同
(客)博士樣聞けば多くの子を儲け　紋太
(客)愛妓云々は博士の若い時　睡花
(客)藥局へ遠く博士は木を繰り　二南
(客)沈默と闘ひ博士室を出る　亂耽
(客)電燈へ博士苦笑を洩らすなり　同

人博士たゞ踊る夫人へ遠く立ち　迷亭
(地)博士の子博士の樣に思つてゐ　岳靜
(天)世を渡る事を博士は知つてゐる　素生

席題「聖人」　迷亭選

聖人にされて年上むきになり　伸
聖人の事蹟が讀めぬ墓の苔　愚陀
聖人でない過ちと許される　小蓬
聖人の門へいたづらして歸り　亂耽
聖人に裏の切戸が閉めたまゝ　睡花
聖人でなし誘惑に負けて行き　素生
物足らぬ夜ありひじりの妻若し　東洋鬼
聖人の語尾がはつきり殘るなり　二南
聖人はほんまかいなと見直され　同
(佳)聖人は聖人にして酒を呑み　同
(佳)聖人にされて下宿に獨り居る　素生
(佳)聖人を褒めて仲居は煙むたがり　東洋鬼
(秀)陶然と聖人樣の先に居る　亂耽
(軸)聖人は爲替の着いた夜に破れ　迷亭

席題「安着」　睡花選

驛前で生徒の敗に異常なし　華水
安着のそれから先が案じられ　觀月
安着の知らせ兵隊らしくなり　完二
平凡な息子となつて馬鹿歸り　愚陀
安着へ父はしばらく正座をし　里十九
一家中起されて見る「無事着いた」　一孝庵
安着へ一人たりない顏があり　伸
安着の電報の字が躍つてゐ　二南
安着の手紙嬉しいとこも書き　山都
安着へ掻き分けてくる寫眞班　一狂
上海へついた知らせがあつたゞけ　むつみ
安着の寢られなかつた事を云ひ　小蓬
安着へ蝙蝠傘が邪魔になり　同
安着を知らせる葉書短かすぎ　嶺月
出迎ひへ安着少し喋りすぎ　同
安着の涼しう書いた原稿紙　鮎美
安着へ出す座蒲團は盛りあがり　同
出迎ひへ一汽車遲れ無事につき　東洋鬼
案じてた母へ抜き手が沖に見ゆ　同
(客)手荷物のことで安着暇がいり　嶺月
(客)安着は弟のゐる家をさし　鎌月
(客)安着の夜を遲くまで祖父も起き　伸
(客)安着を日蔭の花も祈つてる　岳靜
(客)定着の母の荷物を持つてやり　素生
(人)出迎へもなく一本のステッキ　英豆
(地)風に吹かれて安着を知らす　亂耽
(天)安着に抱く子供となつてゐる　一狂
(軸)安着はまだ夕刊を讀み殘し　睡花

兼題「重傷」　紋太選

重傷へ檢事しばらく無言なり　京二
醫者が來る迄は確かな口を利き　卯生
重傷の弱味を見せぬ勞働歌　亂耽
重傷へ近寄る足をたしなめる　二南
重傷が罵ることをゆめぬなり　鎌月
重傷に意識があつて泣かされる　迷亭
助かつたが重傷へ默々と　素生
重傷へ四五人葬ッ葉服がつき　東洋鬼
重傷の死んだやうにも傳へられ　岳靜
重傷を傳へともない門へ來る　同
重傷へプロレタリアが寄つてくる　一狂
重傷に明日から困る妻を呼び　同

川柳雑誌社 螢ケ池支部句會（大阪）

安西杏三報

早いもので支部が出來てかもう壹年になる其紀念句會を七月七日午後萬よし氏を迎へて開く。珍しく、ひろし氏も御多忙中を特に聽け付けて下さり種々有益な御話を承る

兼題 水泳 萬よし選

水泳の疲れを昏の色に見せ　葭舟
水泳は入道雲を友として　寂郎
水泳の選手圖だけが笑つてゐ　杏三
書籍からうま〳〵抜けた水およぎ　同
（佳）こうやつて泳ぐのだと砂の上　清志
（佳）競泳に紅一點も活躍し　葛西
（佳）話では皆んな上手に泳げそう　杏三
（佳）後家育ち水泳だけは行ぎぬ氣　葭舟
（秀）飛込みは水の深さを疑はず　光哉
（軸）淡路まで行けと抜手をほめられ　萬よし

席題 安心 ひろし選

心配がなくなり母は急に老け　定義
安心をしてるは親の慾目なり　憲一
うちの子に限つてと安心してる親　光哉
西風になつて錨のもうまかれ　杏三
安心をして郊外に犬と居る　萬よし
危期もう去つたと主治醫頬を撫で　清志
安心をしたのか父の手にねむり　寂郎
安心をしきつて親父ぼけてゐる　同
安心は佛にすがりきつてゐる　光哉
（佳）無心狀それにも母は無事を知る　紫海
（佳）安心が過ぎて出先の出來心　杏三
（佳）母だけに漸く云つてほつとする　葭舟
（佳）安心の境地か蠅は手を合せ　杏三
兼題 ハンケチ選

振つてゐたハンケチ遂に顏をおひ　不希定義
ハンケチを振つて萬歳幕となり　清志
諦めたらしくハンケチ膝に置き　葛西
ハンケチに包む土産の大き過ぎ　光哉
ハンケチのそれへ女性のもつ匂　寂郎
自分のでなかつたやうなハンカチフ　葭舟
ハンケチを忘れたと知る暑さなり　同
ハンケチと團扇で暮す暑さなり　萬よし
ハンケチに男だてらの椽を取り　同
（佳）ハンケチの代りのタオルつかみ出し　寂郎
（佳）ハンケチに水密桃の戀心　光哉
（佳）ハンケチの前を驛長通り過ぎ　萬よし
（佳）ハンケチに品をつくつて婦人記者　杏三
（軸）ハンケチも振る氣になれず立つて

川柳雑誌社 加古川支部 めだか吟社（兵庫縣）

六月五日　水田黄彩報

宿題 銚子

やけ酒は銚子の數が冷笑し　十公
落籍される話銚子が五六本　同
銚子持つて後一本と拜むやう　洛陽
ウエターあゝ失禮と銚子替に　泰山
槍さびへ熱い銚子が削ぎこぼれ　黄彩
二本目は銅壺へ浮いてかんをされ　同

宿題 灯

武者修業幸か不幸か灯を見つけ　黄彩
軒燈の下で財布を調べて見　洛陽
常夜燈物凄い夜を照らしてる　同
灯をたよりに鮮人たどりつき　泰山
灯の消えて風よ吹け吹かば吹け　十公

宿題 マッチ

マッチから隣の人と話し合ひ　洛陽
眞の暗マッチ螢のやうになり　泰山
マッチをば直ぐに咬はへる男なり　十公
秩蘆それからマッチ二三本　黄彩
燃えつきるマッチへ掴みかゝる闇　同

席題 笑ひ

笑ふ父一家はそれに溶けてゆき　黄彩
心中する二人の笑は淋しくて　十公
愛嬌の笑くぼが妙に氣を引いて　泰山

六月二十二日

宿題 蛙

田舍道蛙に小便かけられる　泰山
五月雨に水田の蛙哇に鳴き　梅更
暮になる役は弟と決めて置き　十公
雨蛙しきりに鳴いて空暗し　黄彩

宿題 氷

氷屋ののれん涼しい風を入れ　梅更
氷屋へ夕立きつう叩きつけ　同
氷屋は涼しい聲で汗をかき　泰山
氷割る音にビールを想ひ出し　同
遠慮して氷を水にしてかへり　黄彩
氷屋ののれんから見る白い道　同

宿題 燒芋

足音に燒芋かくす場所もなし　泰山
やき芋屋いつもの小僧買ひしめる　洛陽
やき芋の炬燵へ猫も丸うより　十公
やき芋を湯婆りに買ふ獨り者　梅更
やき芋屋軍手も芋の色になり　黄彩
やき芋屋もう充分の蓋を取り　同

芋ほつこ梶を下せば蓋を開け　尾秋

川柳雑誌社　**姫島支部句會**（大阪）

水谷鮎美報

巡査　橋本二柳子　選

泥棒はどこか巡査は歩いて來　虚生　觀月
結局は巡査が話つけるなり　冷笑
知つてゐる巡査へ女將落ついて　賀名芽
行啓へ交通巡査固くなり　石竹
恩給で巡査を止めるつもりなり　同
そこらにはおらん時分に巡査來る　鮎美
駐在所巡査飯焚く暇があり　同
外人に巡査やたらに握手され　眠聲
その罪へ巡査も思はず貰ひ泣き　同
民衆へさからふように巡査立ち　高橋かほる選

兼題　支那人

支那人がいちばん人氣取つてゐる　觀月
支那人ばかりボート樂しき　石竹
留學生支那人だとは思はれず　冷笑
支那美人溝を越へるに手を引かれ　鮎美
支那人の家に眞赤な花が咲き　同
支那栗の賣れ行き支那人かき廻し　眠聲
破れものなほしと支那人のよこかて　同
（軸）文具屋の後家へ支那人肩を入れ　かほる
本町で會ふ支那人の好い男　同

題　自惚れ

自惚れが古い娘にしてしまひ　虚生
この月給でいつまで俺をおいさく氣　賀名芽
自惚れの氣持で萬事やつてゆく　觀月
自惚れと金とで強く生きてゐる　石竹
怒りもならず自惚聞いてゐる　同
會ひにゆく氣畫風呂で髭を剃り　鮎美
自惚れを裏切るように錢勘定　同
自惚れの強い男に金があり　冷笑
自惚れは一人鏡へ悦に入り　同
自惚れのあとはすけると猪口をさし　眠聲
自惚れの彼の女に限つてなどと云ひ　同

川柳雑誌社　平塚支部　**駒人居偶會**（神奈川縣）

六月二拾三日夜　駒人報

椽先、汗、風の三題

椽先へ來ると奉行の違う聲　駒人
案内者まず汗をふき手を洗い　同
腹違いだけに遠い扇風機　同
迷い子の汗を巡査はふいてやり　同
椽先に一人物編む啞娘　城月
風の神貧乏村を吹きまくり　同
内助の功女房汗になつてゐる　同
海岸の歸り電車で汗になり　美智坊
裏長屋細長い風が吹いてくる　同
椽先へ友腰掛けて聲をかけ　同

川柳雑誌社　**北濱支部句會**（大阪）

谷村稔報

七月十四日夜於支部樓上

路郎主幹其他本社の方々の御來會を得出席者二十四名盛會土佐堀川の涼風に吹かれながら句作三昧に入る路郎先生の「北濱と川柳感」の講話を聞き非常に稗益するところが多かつた。

席題　夕立　互選

夕立へ白靴腰を据へて呑み　伊佐美
失業の夕立雲をみてかへり　稔
夕立に男度胸をみせてゐれ　幸泉
夕立は隣の村をなめて行き　一舟
夕立に電話室の扉が固いなり　同
夕立に顔もあげない物思ひ　冷笑
金盥持つて夕立引きかへし　路郎
夕立が今川を越へ橋を越へ　曼平
夕立にもるとこもある家に住み　同
使ひまだ歸らず夕立頻りなり　湘里
夕立に思はぬ金を使ひたり　同
夕立に馬力は輕い音になり　風柳坊
夕立へ男の力たのもしく　同
夕立が晴れて番傘たな過ぎ　琴人
宵宮の塵を吸ふた夕立　同
夕立は干場をあわてさせただけ　源坊
夕立は隱居の言ふた通り降り　同
夕立に出口から乘る二三人　萬よし

兼題　壽司　かほる選

一つより當らぬ壽司の美味い事　一舟
御壽司迄こさへて待つて居りました　武子
昼蜜壽司おもちやの樣に並べてゐ　水鏡
壽司言つてそれから女言ひ出す氣　革郎
壽司買ふて芝居歸りの御寮人　ひろし
桶壽司の出前は露路の奥へ行き　佳山
握り壽司肩の動きの通り出來　同

兼題　金魚　ひろし選

宿替に金魚鉢ぐちやつてゆき　南天
手品師の金魚は妙に生きてゐる　千代路
雨の音聞き入る樣に金魚居る　曼平
夏だけの金魚きれいな水にゐる　湘里
金魚屋の撰つた金魚が氣に入らず　幸泉
失戀の金魚は沈むばかりなり　風柳坊
朝の陽へ金魚やんわり浮上り　稔

金魚を中に夫婦の睦じさ　革郎
疑はぬ金魚飯粒にも釣られ　源坊
いゝ金魚蜂に刺された樣な顏　素人
小さいのを買ふにランチウ値を惜む　萬よし
儻倖の樣に金魚の生き殘り　佳山
坊々に金魚しば〳〵惱まされ　同

兼題　ビール　萬よし選

峠茶屋冷しビールへ陽が洩れる　曼平
衆議一決ビール運ばれ　亂耽
初手一杯のビール背筋を通るやう　素人
植込が干したビールの底にみへ　琴人
二本目のビールへ煙草買にやり　かほる

席題　ハンカチ　互選

ハンカチに上品過ぎる汗をかき　千代路
ハンカチが上布の袖に透いて見へ　一舟
汗を拭くハンカチ別に持つて出る　稔
汚れてるハンカチ丸め〳〵ふき　曼平
ハンカチを風呂敷にする樂取り　水鏡
ハンカチが玩具にされる人ぎり　琴人
ハンカチもズボンもアイロン掛け出し　ひろし
掠奪のハンカチ自慢さうに見せ　湘里
ハンカチにポケツト皆な探される　同
ハンカチで贈よ〳〵と取り合はず　源坊
ソーダ水又ハンカチを匂はせる　同
ハンカチの彼女の香ひ抱きしめる　革郎
ハンカチの天花粉のさまゝせて來る　萬よし

兼題　夕刊　路郎先生選

下の子も夕刊賣りに行きたがり　武子
夕刊を持つて御膳を遠ざかり　稔
夕刊の釣錢はいらぬと云はぬなり　佳山
持株を賣つて夕刊淋しう見　源坊
夕刊屋チンピラ然と馴れてゐる　琴人
夕刊を殘し床几にすきが出來　二柳子
夕刊は零對零のまゝで止め　萬よし
（軸）夕刊でこきおろさるゝ父を持ち　路郎

川柳雜誌　筬川支部　**川柳たかせ會**（島根）

七月例會
七月十八日午後一時より　於緣之助居
伊藤緣之助報

兼題　カーテン　緣之助選

（佳）カーテンへ向つて妻の細りたる　花情
（人）カーテンの内と外とで戀ひ合ひ　互苦路
（地）カーテンの色にんだ戀を持ち　雷相
（天）カーテンへ綺麗な夜が訪れる　互苦路

席題　雷　互選

雷鳴に冷へ切る猪口の差し向ひ　緣之助
雷が逃げてほふけた猫が出る　雷相

席題　出勤　濁朗選

出勤の辛さも知らず子がじやれる　雷相
（人）出勤へ女中が並ぶ門構へ　幸永
（地）出勤の遲さも早や古參なり　雷相
（天）出勤も三年の道にして　緣之助

席題　消息　互苦路選

諦めてゐても消息は聞きたかろ　緣之助
（人）消息の絶えた曠野に月は照り　幸永
（地）出帆後消息もなく親は老ひ　濁朗
（天）消息も絶えた砂漠の黃昏れる　幸永

席題　金魚　幸永選

よみがへるやうに金魚へ雨が降り　互苦路
金魚鉢れそべつてみるいゝ暮らし　雷相
（人）金魚鉢二人の話面白し　緣之助
（地）夜祭の金魚たしやがむ帶を垂れ　濁朗
（天）色々な姿にうつる金魚玉　互苦路

席題　パナヽ　緣之助選

酒保へ來てパナヽ押し込やに食ひ　幸永
風味する氣味で祖母さんパナヽ食ひ　雷相
果物屋パナヽを添へて値が決まり　互苦路

席題　内心　雷相選

（佳）ほんとうの心と知るか愚かにも　緣之助
（人）内心も言はず淋しい日を送り　幸永
（地）内心を明かして藝者泣くばかり　互苦路
（天）内心をちらり〳〵と仄めかし　濁朗

席題　現在　互選

二階借今日一日のいゝ暮らし　幸永
今聞いたことをあつさり裏切られ　緣之助
その證據現在ここにあるのなり　雷相
境遇が我を許してくれない日　互苦路

川柳雜誌社　**田邊支部**（和歌山縣）

辻左馬報

席題　唇

唇をそらしてまゝ子肱を張り　青磁
唇が嚙んでこらへるため涙　同
唇をつまみ上げたる剃自慢　蒼生坊
唇についた陀羅助腹が立ち　牧太
銚子ふり唇なめて物足らず　丁字路
唇をかんで默つてすれてゐる　いの丸
唇を嚙むは親爺の醉つた癖　美琴
唇の墨に勝氣な女將なり　明荷
口説かれて後家は下唇を嚙み　左馬
唇に取りためているしつけ糸　三休
唇の毒婦めいてる大寫し　愚圖六
唇を尖がらす癖も母に以て　木の子

川柳雜誌社 **糸屋町句會**（大阪）

七月一日夜　於博物館　川合舟々報

兼題　尺　八　刀　三　選

尺八と夜伽の鉦が入りみだれ　松郎
一と息は無駄に尺八曲となり　毒仙
しんみりと吹けて尺八一人きり　陽喜亭
尺八と私の三味で添ひましやう　琴人
職人のくせに尺八上手なり　彩秋
もうあかぬレコード尺八だけ聞く　三笑
尺八の方が引きたつ安來節　双葉子
無職で暮す床の尺八　馬行
俗曲になつて虚無僧汗を拭き　翠峯
尺八の古さに師匠老て來る　孤舟
洋樂にあはす尺八立つてゐる　凡平
尺八へ妾自ら起つて行き　赤城
尺八を手に夕燒の橋を越へ　同
筋骨たくましく尺八の主　蒼梧樓
三曲の尺八だけがみすぼらし　同
（佳）尺八を淋しいものに聞いて來る　同
（同）薄着の家内と合はす尺八　舟々
（同）もぎ取たその尺八をよう吹かず　凡平
（同）尺八を吹いて近所を輕んずる　松郎
（軸）尺八のほかに此頃情女を持ち　刀三

席題　朝　飯　ひろし　選

朝飯へあぐらをくんだ浮氣者　松郎
朝飯へ胃弱浮かない顔で來る　孤舟
朝飯の不味い男でやせてゐる　惡源太
朝飯が皆別々の公休日　彩秋
朝飯へ今夜は歸る手紙が來　凡平
遠足を出して母親朝を喰べ　陽喜亭
朝飯へまだなんですと汗を拭き　同
朝飯に日頃ほゝゐむことばかり　亂耽
一家質素に朝飯の茄子の色　同
朝飯の汁のうまさを家で知り　琴人
朝飯をきちんと食ふて金を貯め　同
親子揃ふは朝飯の時斗り　素人
朝飯を喰はずに出たが氣に掛り　同
内閣にあきれて朝の膳につく　刀三
朝飯にまたも奴隷になる妻よ　同
（軸）ペルシヤ猫膝に朝飯のトースパン　ひろし

席題　水　引　五　選

思ひ出は水引だけのこり　武子
一人者水引が要る事が出來　陽喜亭
水引をとると子供がよつて來る　愚陀
水引に顔の潰れる男伊達　紅巢
水引へつい嬉しさの手がさはり　孤舟
水引を下手に結んで切つてゐる　かほる
紫紺の水引金五百疋　蒼梧樓
水引をつなぎ合はせた贈り物　琴人
水引の心ばかりをかこう締め　凡平
水引がくたびれてゐる贈り物　ひろし
水引の下にうなづくものがある　亂耽
水引をかけて笑止の見舞金　刀三
水引に息子の心暗ふなり　松郎

川柳雜誌社 **神戸支部文月句會**

七月七日　於　四宮神社々務所

會場は心配した程もなく涼しい大阪から萬よし、ひろし、孤舟、愚陀、京二、塊人、の諸氏を迎へて盛會である。兼題の入選者諸氏に紋太氏揮毫の團扇を進呈して和氣藹々裡に會を閉ぢる　楊井二南報

（神戸の出席者）一狂、ひでを、亂耽、鎌月、一孝庵、千鳥、鳴雀、貞德、古洞、東洋鬼、清公子、重陽子、山都、卯生、嶺月、紋太、草生、志郎、千年、華水、小蓬、二南。

席題　花　形　五　選

花形になつてめつきり痩せて行き　重陽子
花形を一人殘して飯にする　二南
花形の今日も明日もの忙しさ　千鳥
花形へ無駄な手紙がどゞくなり　愚陀
花形に招待券を貰ふなり　亂耽
花形の中の花形だまつてゐ　嶺月
花形のほくろを嬉しいものにする　山都
水仕事一座でもてた事もあり　華水
花形が又すりむいた向ふすね　清公子
花形は與謝野晶子に歌はれて　一狂
結婚の話し花形笑ふだけ　京二
花形にやつと仕上げて裏切られ　同
アンコールスターうるさいなと思ひ　小蓬
スターなる故暗闘も續けてゐ　同
花形の死へ徐ろに幕が下り　同
花形を怒らしたのが首になり　孤舟
花形の素顔と藝者飲んでゐる　同
裏切つた樣に花形休むなり　同

席題　落　書　萬よし　選

落書に大きく見せた人間味　愚陀
落書を巡査讀んでは笑つてゐ　千年
校長の似顔へ雨が吹きつける　孤舟
落書へ未だ内心は怒つてゐ　二南
電車から見る落書に笑はされ　亂耽

遊んでは吳れず落書して歸り　嶺月
落書へ小使バケツ提げて行き　紋太
落書をほめられてつい白狀し　山都
相傘の壁へ文句を付け加へ　ひろし
うなづかず事も落書かいてゐる　小蓬
蜘蛛の巢へ落書少く遠ざかり　同
(佳)落書へ頭の惡い奴が寄り　二南
(佳)落書の相合傘はまがつてゐ　鎌月
(佳)落書にこゝらあたりの柄が知れ　千鳥
(佳)寄宿舍の壁に樗牛は生きてゐる　一狂
(佳)年寄の讀む落書でないのなり　紋太
(人)落書にふられた奴の名も交ぢり　京二
(地)落書のこゝら神官來ぬところ　紋太
(天)落書を氣にして以來會はぬなり　東洋鬼
(軸)落書の天才らしいところも見せ　萬よし

席題　晩婚　清公子選

晩婚のまだ詰襟でつとめてゐ　亂耽
晩婚は判任官となりにけり　一狂
晩婚の息子働くやうになり　千年
晩婚のそれから博士よく笑ひ　京二
大學を出ても四五年もらはぬ氣　鳴雀
晩婚の無事にくらしてゐるさうな　鎌月
晩婚をうらやんでゐる子澤山　ひろし
秀才は今も獨りでゐるそうな　重陽子
晩婚に的の外れた噂なり　志郎
晩婚のこの頃食へろ樣になり　東洋鬼
晩婚の噂をよそにバイオリン　鳴人
晩婚に貯金の減るも仕方なし　紋太
晩婚へ眼にも入れたい子が生れ　萬よし
晩婚のさきつた樣な事を云ひ　小蓬
(客)晩婚の髮の薄いが目立つなり　草生
(客)晩婚の風邪ばかりひく子を育て　萬よし
(客)年四十博士へ嫁が來る話　嶺月
(客)晩婚をして茶屋酒が忘られず　愚陀
(客)良緣にされて晩婚淋しがり　小蓬
(人)晩婚の夫の髯の頼母しく　孤舟
(地)晩婚の淋しう笑ふ日記帳　亂耽
(天)晩婚のどちらも局へ勤めて居　紋太
(軸)晩婚は否定出來ない世相です　清公子

兼題　鏡　紋太選

窮屈な鏡へ動くコンパクト　古洞
手鏡へ睡眠不足ふけを掻き　萬よし
ガレーヂの鏡眞晝の風にゆれ　亂耽
許された後で鏡の前へ立ち　重陽子
今盛つた林檎へ鏡寒う見ゐ　同

席題　浴衣　塊人選

浴衣がけに誘はれて出る浴衣がけ　千年
盛り場へ浴衣の足がのびて來る　ひでを
蓬ひに行く浴衣は輕く風を切り　孤舟
それらしい浴衣に寄れば歩き出し　卯生
湯上りの裸へ浴衣投げつける　小蓬
書籠するつもり浴衣を着せられる　一孝庵
貸浴衣花火の方へ歩き出し　東洋鬼
貸浴衣知らぬ名所へ夜を更かし　志郎
初戀の二人へ浴衣白すぎる　古洞
浴衣きて出ればみてゐるよその家　鎌月
きつちりと襟浴衣を着て涼み　京二
迷つてる浴衣へ母も口を添へ　鳴雀
貸浴衣黑い手首がにゆつと出る　重陽子
浴衣着て神經質に坐るなり　萬よし
よく肥ゐた浴衣運轉臺に立ち　一狂
橋の上浴衣東へ西へ向き　同
浴衣がけ腕卷時計やぼに見ゐ　ひろし
(人)廣告燈浴衣の人へ流れて來　二南
(地)今更に浴衣の妻へ目をそゞぎ　卯生
(天)交番で色街を聞く貸浴衣　清公子
(軸)家内中同じ浴衣の痩世帶　塊人

川柳雜誌社　駒人居偶會（神奈川縣）
平塚支部　同人報

七月七日夜　題　夏、本店、藝、無駄、金魚

蚊いぶしへ聲をかけねばすーと云い　美知坊
アイスクリー書籠の顏でのんでいる　駒人
本店に勤て白髮とはなりぬ　城月
義理もあらうが本店へ註文決め　美知坊
本店は忙しさうに水をまき　駒人
行詰り一かばちかの藝もやり　美知坊
老夫婦小犬へ藝をさせて見せ　城月
無駄だつた事を悔てる形見分　駒人
人生を無駄にすごして高齡者　城月
無駄道をして新宅へやつと着き　美知坊
無駄紙を母そろへてとつて置き　同
金魚賣靜かに午後の町をすぎ　香川
金魚賣り呼ばれてくるり肩をかへ　美知坊

川柳座談會（金澤）

作れば足ると謂ふ月並な句會と一句でも佳い句を作らうと謂ふ研究的な會と微溫的ながら金澤柳壇も二派に別れようとしてゐる、私が催してゐる會は、句でも好い、近代の川柳を大衆に示すため、いくらか積極的に進まふといふのである。集る作家も多くは新進で、はちきれそうな熱を持てゐる事を喜ぶ

（眼隱子報）

蔭裏に芽生にてやはり春を吸ひ　銀砂子
賴られる息子に何時かなつてゐた　同
我が心しばし櫻んぼを見る　紅の花
思ふ事のみ漁り火の冷たく　同
諦めて呉れとお金を呉れました　好次
無邪氣さの子供の間を笑はれず　同
闇ては居るが靜かに夜を待ち　冬青
むらさきに暮れる街をば足早く　同
パンを得るための務めに從ふて　租影
暫くは其の日實も信じられ　三波子
歩みなく牛むつつりと土を踏み　すみ三
人形になつて暮せば賞めて呉れ　柳二郎
何時迄も反く力もなく二人　眼隱子

月二會例會（尼崎）

六月二十三日　二竹報

席題　仕事　互選

仕事とはいひ條いやな氣にもなり　二竹
仕事着のまゝで子供をあやしてゐ　竹城
叱られて元の仕事にとりかかり　二水
受付の個性が知れる認め印　松郎

席題　團扇　互選

團扇の影から目ばかり笑ふてる　吟女
つゝましく團扇持たれる應接間　二竹
さうでせうれと團扇でつめよられ　竹城
買物で貰ふた團扇もてあまし　柳蛙
耳よりな話團扇をとめるなり　二水
轉宅の荷にうとましき蒲團扇　木三

名賀壽會例會（尼崎）

六月十七日　於清水慮白居中野玄洋報

席題　持ち前　互選

持ち前の通らぬ軍紀嚴として　玄洋
持ち前でもうすまされぬ齡であり　眠聲
言ひ出して引かぬへ女用口を入れ　思案坊
持ち前に一歩讓つて座を下り　同
持ち前を知つてか人の遠ざかり　吉期
持ち前が斯うしたのだと妻の愚痴　慮白
持ち前がつい成功の糸を切る　悅路
自分では持ち前なんか知らぬなり　石竹
持ち前はどうでもよいが宵の首尾　同

席題　蚊帳　互選

枕蚊帳もう間にあはぬ子となりて　吉期
日曜日蚊帳を外して又眠り　玄洋
女房へ蚊帳の苦勞のお客が來　同
針の手が寢顏をのぞく枕蚊帳　慮白
蚊帳越しにまあお這入りと宵の口　きくを
顏丈けを入れて晝寢の枕蚊帳　同
蚊帳の外四角に廻り探すもの　眠聲
眼を覺まし蚊帳から子供這て出る　悅路
醉ふて寢る愚痴に女房蚊帳をつり　思案坊
蚊帳吊つて蚊帳一ぱいの夢を見る　同
蚊帳つらぬでもと女房けなるがり　石竹

席題　下駄　互選

お土産の下駄を掘つて寢て仕舞ひ　慮白
女下駄はいて出たのを知らぬなり　石竹
下駄を見て隣の子供そつと去ぬ　悅路
大晦日の子供は下駄を抱いて寢　きくを
來て見れば早玄關に下駄の數　思案坊
きつちりと下駄ぬいであるお家柄　眠聲
下駄提げたまゝま飛行機どこですか　同

兼題　短氣　眠聲　選

振り上げた拳短氣はもてあまし　吉期
それそこが短氣ぢやと云ふ親の口　悅路
短氣者今朝も靴紐切つちまい　慮白
短氣者又もくゞりで頭打ち　同
親方もついて短氣の詫びに來る　玄洋
短氣をば男と思ひ惚れて居り　同
掛け合ひは短氣らしいもつて來る　同
負ふた兒に短氣なことも折れてくる　石竹
結局は短氣が折れて内へ入れ　同
雁首をたゝいて折るも短氣なり　きくを
女房は短氣を知つて素直なり　同
赤面の至りと短氣恐縮し　眠聲
卷き帶の儘で短氣は出て終い　同

かほる居偶會

六月十三日　伊藤愚陀報

不良少女

不良少女ノートの裏を汚すなり　亂耽
不良少女せめて足でも細くあれ　同
不良少女痴人の愛を借つて來る　かほる
團長であつた話ん女給する　愚陀

糸屋町偶會（大阪）

六月十八日夜　川合舟々報

題「下女」

茶碗破つたを言はず下女寢てしまひ　赤城
呼鈴に女中が出ると思ひきや　萩麿
お仕着せで座れば下女になりおせ　白蝶
すそ湯乍らも下女の行水　翠峯
下女去んでからの御飯もんが出來　同
あい間には下女に慰さめられて　舟々
木當に子供の好きな下女でした　同
下女の手の思つたよりも溫かし　毒仙

白粉を塗られば下女の美しき　同
下女二人つゝましう留守をあづかる　松郎
朝な朝な下女の背丈が伸びて行く　同

南海至誠

川柳の會

天下茶屋　太田朝陽報

七月九日午後六時より天下茶屋集會場に於てその第八回を開き作句氣分に浸る。例の如く麻生路郎先生の兼題選句の講評あり十時に散會した次回は納涼川柳大會濱寺食堂樓上集合期日八月十二日午後六時より兼題「起ぬけ」及雜吟各五句以内路郎先生選

兼題「鷄」　麻生路郎選

鷄を追ふて婆さん茶をすゝめ　靜石
働けぬ俺だ嬉しい鷄のアラ　一杉
奥座敷すぎて鷄裏へ逃げ　喜樂庵
鷄の餌丈けはどうかれるほど癒り　柳骨
あの鷄かなどゝ思へば不味くなり　泰平
鷄舍のすみ妻が置いたか蚊取香　同
門先を狹く鷄飼ふてゐる　一杉
鷄の目にチト贅澤な世帶なり　多聞
鷄の餌がおくれる日曜日　朝陽
(人)鷄に尉斗つけて來る嫁の里　黑天子
(同)賣られたと知らず鷄籠でなき　朝陽
(地)鷄は思案のやうに歩いてゐ　多聞
(同)喰い飽いた鷄は散歩の姿なり　朝陽
(天)鷄だから無雜作に殺すのだ　呑陽

兼題「雜吟」　麻生路郎選

長男に生れて損をしたと云ひ　末廣
警笛に一寸走るも女なり　一杉
思案して娘身賣りを思付き　靜石
斯んなのが人生かなとソーダ水　吉田
立膝を安樂椅子のやうに入り　喜樂庵
初めての卵子ですよと妻は出し　艶之助
あの妓なら洗ひ髪でもかまわない　五輪
慰みに惚れたんでせうは情無し　同
ガタ馬車のまだある歸省しみたし　樂居
ざまア見ろと罵りたげな撒水車　同
看護婦の理想パイプルから起り　朝陽
誘はれた着物は少しみじめすぎ　同
(人)歸つたて添乳は水屋指した丈　艶之助
(同)此の雪に職を拾ひし人もある　五輪
(同)女將鼻の先だけ爛いでゐ　萬年青
(地)ボート屋はモガの方から金をとる　喜樂庵
(同)高ふ吊る蚊帳は叔父への心やり　同
(天)釣瓶繩さきにゆずつた氣安さに　多聞

席題　夏　帽　互選

思ひ切つて夏帽を着てゐを出る　吉田
年頃の娘にあたら夏帽子　堅坊
夏帽を脱げば手拭ドカと落ち　呑陽
夏帽を石で押さへて沖へ出る　喜樂庵
夏帽を氣にして檐をつたつてゐ　泰平

席題　日歸り　互選

日嬉りのまだ〳〵見たい所もあり　阿形
日歸りの旅がへつてから飯を食ふ　吉田
日歸りは安い西瓜の話もし　一杉
泊つたと思つて夕飯奢るなり　萬年青
日歸の旅は大方汽車の中　堅坊
日歸りの名所を問はれ忘れてゐ　朝陽
日歸りの足ばつかしが早くなり　貴山
日歸りは一ト風呂さへもせかされる　五輪
日歸りの月は戻りの汽車で見る　樂居
日歸りは子が待つてゐたこもきゝ　多聞

名賀書會例會（尼崎）

六月三十日於虚白居　玄洋報

席題　夏　祭　互選

行水のあとに汗する夏祭　曳白
氷丈け喰ふて歸つた夏　玄洋
夏祭小僧も今日は酔はされて　きくを
夏祭序の樣にお參りし　虚白
素麺にもうあいて居る夏祭　眠聲
夏祭にらいほこりに水を撒き　同

席題　七　夕　互選

七夕に隱居一枚お家流　玄洋
天の川仰いで見れば星ばかり　ゆたか
七夕の姉の鋏よう切れる　虚白
笹の葉にぶら下つてる天の川　曳白
七夕の紙へ兄弟字を競べ　きくを

兼題　音　信　眠聲選

嫁きますと從妹それから音信せず　虚白
落ち付けば音通するよと汽車の窓　きくを
就職の吉左右を待つ日の永き　同
初音信今玄海を渡つて居　曳白
たま〳〵の音信は息子の無心狀　同
發憤はまだ音信せず母は老け　玄洋
下女丈けは別な氣で讀む花便り　同
(軸)初音信皆珍らしいこと計り　眠聲

編輯後記

▲此の特輯號を出す爲めに特に編輯會議を路郎先生の御宅で開き、夜の十二時近くまで、同人全部が、如何にすれば內容を充實することが出來るかに就いて熱心に研究をした。

▲本號の內容は從來の特輯號に比較し面目が一新し、極めて充實してゐるつもりである。それは原稿を御願ひした寄稿家各位の玉稿の御陰と感謝してゐる。

▼紋太先生其他の方から原稿を頂いたが、編輯締切り後であつたので、遺憾ながら次號廻しとした。又長野吉高氏の「漱石さんと猫」も誌面の都合上次號廻しとしました。

▼路郎主幹は晩春以來神經衰弱で弱つて居られます、回春を祈つて止みません。

▲七月二日に心齋橋の心齋橋食堂で京阪神社友大會を開いた會する者十七氏、久しぶりの會合だけに歡談、快談湧くが如く萬よし、かほる、二南、双葉子の諸君の隱し藝の發表に皆な感心川柳座を組織して一興行やらうぢやないかと云ふ話まで出る。

▼螢ヶ池支部は七月七日創立一周年記念句會を催され、本社から萬よし、ひろし氏等出席、なか〳〵の盛會であつた。

▼村松曼平、青山孤舟の兩氏が今回維持社友になられ、今後は作句に精進されることになつたことは喜びに堪へない。

▼松丘町二氏は休暇で七月十日から來阪され當分滯在の由。

▼原史風氏は上海へ出張され八月まで異國情緒に浸られる由。

▼本社の八月例會は暑中休暇として休みます。その代りにキャンピングの會を催します別項參照御來會を希望。

▼青明忌を本年は神戸支部主催本社後援で行なふことにしました目次上の記事參照。

▼社友松盛琴人氏は七月例會の席上で出席者全部に投句用紙を贈呈されました感謝します。

▼金澤及び小松支部では七月中旬西本一笑氏の歡迎句會を催され盛會だつたさうです、後から馳せ參じた加香、亂靴の二氏と落合ひ北陸各地の溫泉を廻つて俗塵を流し廻つたさうです。

▼岩本素人氏は七月十七日三重縣鳥羽へアル行きをされた。

▼横田眠聲氏は今回尼崎名賀會を指導せられることになつた同會の今後の發展を祈り且つ期待してゐる。

▼喜田飯山氏から通信あり、青森にも夜店があると、大阪をなつかしむことなつかしむこと。

▼富士野鞍馬氏は六月廿七日仙臺市から岩沼町方面へ旅行さる

▼中野柳陽氏の御實父が七月十四日に死亡された、追悼句「矢面に立つ身へ、今ぞ弦が鳴り」を讀んで泣かされた。謹しんで哀悼の意を表します。

▼木村晃卓氏は五月中旬から病臥されてゐるさうです、一日も早く御全快を祈る。

▼內海休步氏は熱病で病臥されたが、漸やく快方に向はれた由喜んでゐます。

▼本社贊助員田中辰二氏は六月十九日熊本放送局で「川柳にあらはれた鉢の木」の題で興味ある放送をされた。

▼尾相潘雷氏等は今回川柳いづも吟社を創立され、雜誌「神在月」を發行される由、御發展を祈ります。

▲畑田炭車氏は今回都合に依り社友を退かれました。

▲山口縣室積町の磯部孔雀氏等が句集川柳室積を發行された

▼近藤飴ん坊は七月十五日大阪放送局で放送をされた。

改號と轉居

▼矢田右太臣氏は「冷刀」▲中西久郎氏は「五合」▲中村無苦知氏は「緋扇」▲桑島文絲氏「虛王人」と各改號

▲德田双柳氏は「大阪市西成區紛濱中町三ノ七二」▲今村吉期氏は「尼崎市大物村西横提二〇七ノ一」へ▲道田葉平氏は「大阪市東成區中道町二二九」▲久世一路氏は「大阪市港區北福崎西ノ丁四」へ▲前田五健氏は松山市藤原五四七ノ一へ各移轉

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は四型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第五卷第十號課題

八月五日締切
（各題十句以内）

▼卵　村田周魚　選
▼墓　福田山雨樓　選
▼空瓶　松丘町二　横田眠聲　共選

第五卷第十一號課題

九月五日締切
（各題十句以内）

▼石炭　森東魚　選
▼天井　矢田冷刀　選
▼入齒　西本三笑　中川眼隙子　共選

毎號募集

▼近作柳樽（廿句迄）麻生路郎　選
▼古句質疑（三句迄）蛭子省二　擔當
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號	一部 金參拾錢
新奉特輯號	一部 金五拾錢
八月特輯號	一部 金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）	壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）	參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和三年七月廿五日印刷
昭和三年八月一日發行

第五卷第八號
（毎月一回一日發行）

大阪市西成區千本通五丁目七番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎

大阪市西成區千本通五丁目七番地
發行所　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂　（神戸）米田、後藤　（廻館）石塚
（石川縣小松）マコト屋　（京都）三宅

川柳雜誌社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　伊藤彦造　西原柳雨　片岡直方　大島濤明　嘉納純　田中辰二　田中香涯　長崎柳秀　藤本卯之助　國枝史郎　藤村作　小酒井不木　赤井清司

客員

末弘嚴太郎　小出楢重　木村半文錢　柴谷柴舟　篠原春雨　蛭子省二　森東魚　高見柳骨　竹内多聞　矢田右大臣　横田眠聲　高橋かほる　岡田三面子　川上三太郎　川村花菱　岩崎柳路　岩本素人　西原史風　太田朝陽　徳田双柳　亀井花童子

特別社友

酒井駒人　喜田飯山　北山悟郎　庄萬よし　猪野燕柳　石川双葉子　長谷川一徹　本田柳一路　高橋緑郎　谷村稔　辻左馬　川眼隱子　中野柳陽　中澤濁水　中見光路　中島鐵洲　村松曼平　桑原京馬　柳川麻生路郎　楊井二南　安西杏三　松丘町二　越村加香　青山孤舟　朝田新水　水田黄彩　谷鮎美　檜山千代二　森田笑太郎

編輯局

（特別社友）

橋本二柳子　合舟々　琴人　盛乃　革郎　安井ひろし　主幹

道頓堀支部　大阪市南區新戎橋南詰　幹事　庄萬よし

天滿支部　大阪市北區北森町三十二　幹事　北山悟郎

濱寺支部　大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七　幹事　太田朝陽

神戸支部　神戸市花隈町九六　幹事　楊井二南

山口支部　山口縣山口町石原小路　幹事　柳川洲馬

東京支部　東京市外杉並町高圓寺八二三　幹事　岩崎柳路

函館支部　函館市青柳町五〇　幹事　龜井花童子

住吉支部　大阪市西成區粉濱中町三七二　幹事　德田双柳

朝鮮仁川支部　仁川仲町一丁目八　幹事　矢田右大臣

松江支部　松江市外川津野津方　幹事　松丘町二

小松支部　石川縣小松町猫橋詰　幹事　本田柳一路

高知支部　高知市本與力町　幹事　中澤濁水

姫島支部　大阪市西淀川區姫島町五二一　幹事　横田眠聲

螢ヶ池支部　大阪市外阪急沿線刀根山療養所内　幹事　安西杏三

金澤支部　金澤市八幡町五三　幹事　中川眼隱子

糸屋町支部　大阪市東區糸屋町二丁目七　幹事　川合舟々

田邊支部　和歌山縣田邊町幽靈松下　幹事　辻左馬

籔川支部　島根縣籔川郡今市町本町　幹事　森田笑太郎

豐橋支部　豐橋市旭町　幹事　高橋緑郎

平塚支部　神奈川縣平塚町旭座前　幹事　酒井駒人

加古川支部　兵庫縣加古川町大川町　幹事　水田黄彩

青森支部　青森市古川町美法二七　幹事　喜田飯山

京都支部　京都市七條大宮東入　幹事　桑原京郎

富岡支部　山口縣都濃郡富岡村上野　幹事　兼重白鷗

鳥取支部　鳥取市川端町一丁目　幹事　中島鐵洲

北濱支部　大阪市東區北濱一丁目三五　幹事　谷村稔

暑中御伺

糸屋町支部

同人

和田萩麿　東區島町二(奥山昇三方)
森本赤城　東區島町二(谷中方)
川合舟々　東區糸屋町二丁目
和田源坊　浪速區西圓手町一〇一二
島田翠峯　東區南農人町一丁目
桑原京郎　京都市七條大宮東入
加藤翠川　東區清水谷西ノ町三六七
朝田新水　市外守口町樋之口(車庫裏)
石川双葉子　府下北河内郡三郷村高瀬
村野蒼梧樓　住吉區天王寺町一〇四〇
八木春仙　東區糸屋町二丁目

川柳たまむし吟社

大阪市北區曾根崎上二丁目五七

鳥山一庭　大阪市東淀川區三津屋町三三六

山本雨迷　大阪市東淀川區中津濱通一ノ一〇二

增位汀柳　大阪市天王寺區上汐町一ノ五一

暑中御伺

龜井花童子　函館市青柳町五〇

暑中御見舞

神奈川縣平塚支部

中原娛鹿　平塚町新宿四九五

小宮城月　平塚町新宿一五〇

酒井駒人　平塚町旭座前

下田美知坊　平塚町新宿一一五二

川柳鼓

大正五年十月十日第一種郵便物發行
毎號五十回

岡部美州　宮前滿洲流
田部京平　森下松陽
高岡可敷　森田呆氣星
中山春鬼　顯間省二
福島柳也　蛭子
菊川泰平樂

發行所　平壤府幸町二八
鼓川柳吟社
一部十錢　一年一圓

暑中御伺

川柳雜誌社　螢ケ池支部

居伴富大奥加加田南中植村山松松寺小安三
相田倉野地藤中保山田中並本元西川好
清島寂昇紫月禎松るい邦不芳光葛定杏葭健
志村郎二海仙三子丁靜希郎實哉西義三舟一

川柳三味

（一部二十錢見本進呈）

朝鮮代表の柳誌

京城櫻井町二ノ三二

南山吟社

暑中御伺
南海電車
池澤樂居
大阪府下高師ノ濱

暑中御伺
大阪醫科大學
長崎柳秀

暑中御伺
蛭子省二
（竹馬居）えびす・せい二
朝鮮・光州

暑中御伺
北野三次
大阪府下富田林町一二八

暑中御伺
古谷伴内
大阪市北區茶屋町鷄ノ茶屋

暑中御伺
長春川柳會
中野柳陽
長春露月町貳丁目四〇、二四

暑中御伺
今村吉朗
尼崎市大物村西横堤二〇七ノ一

暑中御伺
清水虚白
尼崎市大物村四七）番地
（川柳名賀壽會事務所）

暑中御伺
岩本素人
岩本武子
京阪沿線香里

暑中御伺
中澤濁水
高知市本興力町

暑中御伺
安井ひろし
安井欣女
大阪市南區安堂寺橋西詰

電氣句報 柳壇の句を募る
◇用紙ハガキ、題隨意

暑中御見舞

月二會

尼崎市難波五九六ノ一　小林文月
尼崎市別所村五三八　永島二水
大阪市姫島町一八八七　竹本二竹
尼崎市宮町四五　稲吉柳蛙
尼崎市東難波字横枕　青山竹城
尼崎市別所村四五〇　杉原木三
同所　杉原吟女

暑中御伺

庄萬よし

大阪市南區道頓堀
新戎橋南詰

暑中御伺

平素は御無沙汰ばかりいたして居ります。甚だ勝手な申分ですが片便りでも時折のお便りは下さるやうお願ひします。一々御返事の出來るやうな時間を作ることに致したいとは思つてゐますので

麻生路郎

暑中御見舞

川柳雜誌社　北濱支部

大阪市東區北濱一丁目武兎方

六角風柳坊　内本　曲水
花岡　秋波　阪井千代路
河合　南天　三好　革郎
谷村　稔　新堂伊佐美
谷垣美智郎　住田　一舟
村松　曼平　松岡　幸泉

同人

緣談先ノ調査
資産信用調査
家出入ノ所在探査
素行動靜祕密調査

大阪市東區北濱一丁目

赤埴探偵社

赤埴秀吉

電話本局二三七一番

（祕密嚴守）（調査速正）

財産隱匿、特許侵害等ノ探偵、地方出張探査ノ依賴ニ應ズ

營業八年中無休

暑中御伺　窪田銀波樓
金澤市裏古寺町十八ノ二

暑中御伺　福田山雨樓
浪速區湊町保線事務所
戎一〇〇三

暑中御伺（愛宕川柳社）　富士野鞍馬
東京王子堀ノ内一三四

暑中御伺　吉川啞人
山口縣久賀町日曜堂書店

暑中御伺　澤井朱唇子
大阪市北區空心町一丁目
四二番地　電北七二六一番

暑中御伺　猪野燕柳
大阪道頓堀大笑亭内

暑中御伺　松丘町二
松江市外川津村

暑中御伺　松盛琴人
大阪市北花區上福島
南三丁目六六

暑中御伺　村井多喜女

暑中御伺　關本雅幽
大阪市港區鶴町三丁目一一〇

暑中御伺　木村晃卓
別府市行合町

暑中御伺　中島鐵洲
鳥取市川端町一丁目

暑中御伺　高橋かほる
大阪市南區北炭屋町三〇一
電話南五九六番

暑中御伺　安藤花蝶
安東縣驛前通社宅第一ノ二

暑中御伺　水田黃彩
兵庫縣加古川大川町
川柳めだか吟社

暑中御伺　池田菱明
長春川柳會
暑中御伺　萬木東狂子

川柳「神在月」創刊號　十錢
暑中御伺　伊藤綠之助
島根縣簸川郡高松村

暑中御伺　丹波太路
堺大寺西門前
電一、一四七番

川柳「柳窓吟社」
暑中御伺　柳窓亭春彦
大阪市北區曾根崎上二丁目
（北區區役所南横町指田）

暑中御伺　辻左馬
和歌山縣田邊町幽靈松下

暑中御伺　大山露斗
大阪市浪速區反物町一三
三七　地銅商林常造方

暑中御伺　愛知樂二
大阪市浪速區敷津町
二丁目一〇

暑中御伺　道田葉平
大阪市東成區中道町二二九

月刊誌あけぼの
暑中御伺　久田狂水
福島縣石城郡磐崎村
川柳あけぼの會

暑中御伺　小鐵千鳥
兵庫縣小物屋町壹

暑中御伺　越村加香
大阪市東區備後町二丁目九
（金子方）電話本町八二三番

暑中御伺　西本三笑
大阪市天王寺區東平野町
二丁目（山田重方）

暑中御伺　岩崎柳路
東京市外杉並町高圓寺
八二三

暑中御伺　喜田飯山
青森市古川美法町二七

川柳雜誌社　姫島支部
暑中御伺
横田眠聲
都藤冷笑
水谷鮎美
森石竹

暑中見舞
川柳雜誌社　神戸支部
神戸市花隈町九六

金宅志郎
赤松千年
北岡小蓬
日野華水
住田亂耽
楊井二南

暑中御伺

南海昭和至誠團學藝部　川柳會同人

半田悌次　寒川白雨
池澤樂居　高見柳骨
吉田一稻　三輪五輪
太田朝陽　森本黑天子
江口泰平　漆島靜石
山田久太郎　末廣昇
大塚堅坊　菅呑風
萬屋瓢霞樓　水內茗丘
土井萬年青　河內種松
友淵貴山　河村繫舟
阿形一杉　竹內多聞

暑中御見舞

川柳雑誌社天満支部

北區天滿橋筋五丁目九五
井上凡平

北區河内町二丁目五
青山孤舟

東區鎗屋町二丁目二六
岡田陽喜亭

北區北森町三三一
北山悟郎

北區旅籠町三二一藤繩内
北山十字路

北區天神橋筋三丁目二五
東谷聞路

北區天神橋筋三丁目二五
中西五合

北區天神橋筋四丁目三六朝日餅内
谷内靖弘

北區與力町一丁目一八
田中彩秋

暑中御伺

冷刀……と改名しました
ごうぞよろしく

元右大臣
矢田冷刀
仁川仲町

暑中御伺

三好革郎
大阪市外池田町マスミ七八五

暑中御伺

橋本二柳子
大市市住吉區杭全町六〇三
市電阿部野橋ヨリ平野行の市營乘合自動車にて杭全町下車東南五丁

新聞雜誌印刷並ニ圖書出版業

其他美術
印刷百般

藤本兄弟社

大阪市東區農人橋二丁目
電話東一七〇番◆七七〇番

暑中御伺

內科 呼吸 胃腸

和漢洋醫院

醫學博士 長谷川成一

大阪市長堀橋高島屋前

電話 南四一八八番

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本　全一冊

定價　五十錢　郵稅　二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話　南　五六二一番

入院隨意

院長 醫學士 山縣正雄

本院 大阪北濱三丁目電停前
電話 本局 二〇八〇番

暑中御伺

山縣眼科病院

分院

大阪 梅田、天六、玉川町
九條、松島、戎町二
汐見橋、東雲町

神戸 穴門上、湊町一、小野柄二

西宮 寺前町

清酒

白鶴を飲む同朋がなつかしい

滿洲へ積む白鶴の樽の數

攝津灘

嘉納合名會社釀

アサヒビール
清涼飲料
リボンシトロン
大日本麦酒株式會社

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

定價 壹圓（送料拾錢）

發行所 大阪市西成區千本通五の七 不朽洞

振替大阪五二五八五番

實に氣持のいゝ本だと云はれてゐますのでよろこんでゐます。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。（霞乃）

避暑に書齋に

氣の利いた贈答品！

川柳とは何ぞや――の數萬言を聽くよりも本書を繙け！

實に愉快に、而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

內容概目

川柳漫畫 累卵の遊び

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博した川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により收錄したるもの――。

日月は輝く

「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの――。

大衆と共に

「講談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの――。

人氣と賣行日本一

貝印内外レコード

二大名作映畫レコード

映畫說明 **ベルス**(二枚)守住純一
同 **雪の夜**詠(二枚)笹木溪雪

管絃樂 映畫樂 **格鬪曲集粹**(其一)YN管絃樂團
義太夫 **千本櫻**(鮓屋の段)(二枚)竹本東廣 糸豐澤仙平

琵琶講談 **乃木將軍鹿島詣**(二枚)水也田呑洲
軍隊喇叭 營内の二十四時間 歩兵第八聯隊 阪井軍曹外
軍歌 憶**橘中佐**
送は六百八十里 内外コーラス團
喜歌劇 **出鱈目放送局** CP歌劇團
涙花節劇 近世俠客 扇子家 **清水次郎長**(二枚)廣三郎一行
涙花節 五人白浪 **博多小僧長吉**(二枚)藤川友重
同 **五寸釘寅吉**(二枚)壽々木米若
同 **忠僕直助**(二枚)吉田一若
八木節 **佐倉宗五郎**直訴(二枚)堀込源太

宣傳 **靴が鳴る**(ピアノ・ヴァイオリン・ハモニカ伴奏)中山喜美子
雀の學校(ピアノ・ハモニカ・シロホン)青木定夫 福崎亮介 荒川倉藏
ツェーブ浦島太郎(ヴァイオリン・ピアノ伴奏)荒川倉藏
ベル牛若丸(ヴァイオリン・ピアノ伴奏)外
尺八連管曲 **千鳥の曲**(オボー・フリュート・クラリネット・インクリッシュ・バズーン・ベル)一部上田芳憧 二部岡田公憧
木管合奏 **宇治茶**(唄)共立檢八
書き送る(ベル・ピアノ)高
ハーモニカ四重奏唱 **雛鶴三番叟** 指揮 福崎亮介
俚謠 **安來節**(シロホン入)出雲福奴
同 **安來節**(米山甚句入)福島かめ子
小唄 **都々逸**(ベル入 シロホン入)吉田奈良勝
書生節 **ヴエニスの船唄** 鈴木白洋
江州音頭 **苦笑ひの唄**(二枚)櫻川大龍
山内一豐の妻(梅ヶ枝の手洗鉢)
同 **家庭平和の巻**(枚)櫻川梅子

合資會社 **内外蓄音器商會**
阪神沿線今津

大正十三年三月三日　印刷納本
昭和三年七月二十五日　第三種郵便物認可
昭和三年八月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌（第五十五號）

特價　四拾錢

にきびとり美顔水

心ある家庭には是非常備せられたき皮膚衛生藥

(一)ニキビ、吹出物＝婦人は固より男子方でも、ニキビや吹出物の多いのは見よいもので御座いませんが、この藥は頑固なニキビや吹出物にも確かな効能がありますので、信用を博して居ります。

(二)蚤、蚊、南京虫＝その他毒のある虫にさゝれた時、この藥を附けますと、不愉快な痛さ痒さが止まり、さゝれた跡が腫物などになる事が御座いません。蚤や蚊で夜お子方のムヅかる時など、この上ない重寶な事がおわかりになります。

(三)皮膚を美しくす＝斯ういふ藥ですから、常用すればニキビ吹出物を防ぐは勿論、皮膚は次第に磨きこんだ樣に綺麗になり、顏の美しさを增しますので、心ある御家庭に常備せられて居ります。

發賣元
東京・大阪
桃谷順天館